家庭雜誌

第六十號

本號には夏期附錄として妙篇四種を載せたり即ち

荒野の泊屋　嵯峨の屋主人
廻雪に駕して天使の舞ふあり

夏　蘆花生
秀麗の筆翩々として清風の若し

函嶺所見　愛山生
翠光晴嵐滴んと欲す

想出るまゝ　國木田哲夫
想は飛ぶ支那南北の海の上

青年叢書

全部拾卷
毎月一卷發兌
定價各拾二錢
郵税各二錢

身高峰に起つ眼千里の觀なからんや。新勝は國運を急變し而して國勢の進轉は國民の資格と伴はざるべからず。國民の資格を高くするの道果して如何、連勝國は大陸大洋の主人たり、一大故鄕を造るの道果して如何。隨ゆべからざる鐵創を頑清に加へ、新興國として世界の嫉妬と畏懼の中心に立てる大日本は武裝せるスパルタに非らずや。國運は新組織を要す。完美なる國民は完美なる個人也、樹を植て一家十年の計を爲す者一國百年の長計は人を造るに在るを忘るべけん乎、武育的國民にして高義的市民、時務を知り技術を有せる人、一代の人にして世界の人を造るは一等國の國是、今日の急務也、大なる日本人を造るは大なる日本國を形る唯一の道に非らずや。新人物は新事業を遂み、新事業は新國運を開く。學窓の下、西天の一方を睥睨し雄心壯圖を抱へし新國民たらんとする人よ『青年叢書』を讀め。

- 第壹卷　武備教育
- 第二卷　遠征
- 第三卷　市民
- 號外　本朝美術
- 第四卷　職業論
- 第五卷　學校
- 第六卷　技術
- 第七卷　傳記
- 第八卷　時世
- 第九卷　實踐道德
- 第十卷　壯遊

以上既刊

東京市京橋區日吉町
發兌元　民友社

家庭叢書

定價各拾錢 郵税各二錢

第一巻 家庭の和樂
第二巻 夏の家庭
第三巻 玩具と遊戯
第四巻 家庭教育
第五巻 小兒養育
第六巻 家庭衛生
第七巻 家政整理
第八巻 簡易料理
第九巻 社交一斑
第十巻 婦人と職業
號外 家庭理財
號外 名士と家庭 近刊

家庭叢書發刊以來大に世の好評を博し、毎冊版を重ぬる幾回、實に非常の勢力を以て愛讀諸君の意に投じ、已に其三四冊は高等小學校及其以上にある女子教育の學校に於て、其教科用書となすに至り、又家庭の良教育、家庭の新生活、家庭の新組織及家庭の和樂、健全、進歩、改革、矯風、經濟衛生等に志ある家庭にては、必らず一本を座右に備ふに至れり、以て家庭叢書が如何なる勢力を以て世の家庭の模範となり、顧問となり、助言者となるかを知るに足るべし

平民叢書全部拾貳冊

第一巻 十九世紀之大勢
第二巻 世界經濟上之變動
第三巻 國家と政府
第四巻 教育と遺傳
第五巻 文明之弊及其救治
第六巻 現時之社會主義
第七巻 經濟と道德
第八巻 歴史攷究法
第九巻 哲學變遷史
第十巻 白晳人種之前途
號外 銀貨之過去現在未來
號外 責任内閣

定價 一冊拾貳錢 號外一冊拾錢 郵税各二錢

全部取揃御注文の節は拾貳冊壹圓拾八錢 郵税拾八錢 金送にて御注文に應ず

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

民友社及家庭雜誌社發兌の雜誌並に書籍

民友社發兌の『國民之友』が、雜誌界の巨人として、世上に認識せらるゝことは、日已に久矣。今や彼れは興廢盛衰、運命の定かならぬ衆雜誌の上に屹立して、炬の如き眼は手と共に到りて大勢を論談し、時勢を制衡し、膨脹的大日本を世界の舞臺に飛揚せしめんと勉めたり。其寄書に、史論に、雜錄に、藻鹽草に、時事に、海外思潮に、經濟時事に、精擇雄拔の文章批評多きは、他雜誌の決して企て及ぶ能はざるところなり。

民友社出版の書籍は、何れも時期に適切なる好著述なり。『平民叢書』の社會人類經濟道德政治歴史に於ける簡明なる理論を示す、『十二文豪』の內外文傑の性行著述を詳述する、皆な江湖に著作の一新面白を發揮するに非ざるものなし。若夫れ『國民叢書』『社會叢書』『靑年叢書』其他の『著書』に至りては或は時務的經綸を、或は文學的興味を、或は家庭的教訓を、讀者の腦中に浸入せしむるに非ざるはなし。

民友社は又家庭に於ける現今の弊習を矯め、新日本の新乳兒、新小兒、新靑年を造るの目的を以て、『家庭叢書』を發行し、其姉妹たる家庭雜誌社にては、毎月二回、平易高妙便益愉快なる議論材料に富む、『家庭雜誌』を發兌せり。

注意　出版書籍目錄は郵劵二錢御投與あらば御送附致すべし

新刊二書發賣廣告

新刊 **第二征淸壯烈談**

繪畫挿入　定價十錢　郵稅二錢

材料の正確と文章の平易とは、前編に於て江湖の既に認識する所なり、本編に至つては更に幾多の雄烈、壯快、痛恨、悲愴の談話を集む、序次錯綜、山盡き、水生じ、花落ち、鳥啼く、讀み去り讀み來れば、泣くべく、勇むべく、樂むべく、悼むべし、千古未曾有の一大快擧は、如何なる代價によりて買はれたる乎、滿州、山東、澎湖の春色は何人の血によりて染められたる乎、是等の事を知らんと欲せば他に求むる勿れ、たゞ第二征淸壯烈談一篇を讀め、

第一征淸壯烈談　定價拾參錢　郵稅貳錢

紙數百八十頁

新刊 青年叢書第四卷 **職業論**　定價十二錢、郵稅二錢

本卷の目次（職業の眞義（生活と事業）、宏業と功名心、職業の撰擇（上、下）時間論、勤勞と休息、社會と退隱、生涯、健康論、處世論、電氣時代の巨人、）

大丈夫の志す處、起つ處、安んずる處を闡明し一代の事業（ライフワアクル）を完ふするの道を概論す。有爲の青年一讀せば起業、處世の法を一悟するに庶幾からん。

發兌元　民友社　東京市京橋區日吉町四番地

社告 家庭雜誌は凡て前金に非ざれば發送せず、見本は郵券五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵券代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割増

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 金子佐治郎

編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿八年八月二十五日發行

家庭雜誌第六拾號

目錄

山光水色……（久保田金仙齋）……

社說

家庭統治の第一義……江湖逸人……一

科學

小兒の世界……嵯峨のや主人……二

史談

ラム家の遺珠……讃美生……五

文藝

ドラ……湖處子……一二

家政

談話につきて……闇芳……一七

家内の喜さ遊（上）……しばのや……一八

海濱の家庭……逍遙生……一九

小兒の言語……二五

手藝案內……二六

造花術

社交一斑……二八

流行の栞……春夢……二八

古今帶の結びふり

雜錄

山光水色……三〇

夏季附錄　文藝

荒野の泊園……嵯峨のや主人……一

夏……蘆花生……一六

西舘所見……愛山生……二九

想出るまゝ……國木田哲夫……三八

家庭雜誌第六拾號

（明治廿八年八月廿五日發兌）

社説

家庭統治の第一義

江湖逸人

家庭を治めて無事平和ならしむるのみならず、また進步活氣あらしめんには殆んど一國を統治する經世家ほどの才能を要するもの也。

世には父母正直にして德行あれば家庭は治まるものと思ふものあれども大なる誤也。勿論家庭には政治家の權數の如きものを要せずと雖も、正直一片にては決して治まるものにあらず、否な唯だ治まることは治るべし。去れども熱誠、識見、經綸もて之を導くにあらずんば進步と活氣とは望むべくもあらざる也。

されば如何にして家庭を統治し進步せしめんかと云ふに先づ余は世の父母をして世の新聞記者、政論家が如何に在朝政治家を批評するかを見て覺る所あらしめんことを欲す。或る政治家は極めて平和ずきなれば人民に令して此かることは爲すべからず、此かることは企つべからずと何事も少しく劍難少しく危險と忍ぶ事は禁止し凡べて『勿れ』づくめに國を治めんと欲す、故に世の批評家は囂々として之を攻めて已まず之がため其政治家の有する美質も世に埋沒して著れざる也。若し彼等にして何事をも禁ずるのみの『勿れ』づくめにて治ることなく、他に有用なる事を勸め、よき事を勵まし、國民の心を之に導きしならば國は平和に治るならんとは批評家の言ふ所也。

此く人心を禁ぜずして之を勸むるは治國の第一要義なるが如し、余もまた云はんとす家庭統治の第一義もまた勞働、善き遊び、善き行を勸むるにあり。彼もあし

し是もあしゝと禁ずるのみにては決してよく治まるものにあらずと。

余は『勿れ主義』にて育てられ殆んど其目的を達したるか如きお姫樣を知れり。手を動かす勿れ足を投げ出す勿れ、徒する勿れ、さはぐ勿れと凡べて勿れを以て禁ぜられたる結果は其活氣消磨して大人氣しきものとなり果てたり。大人氣しきものとは即ち世に出でゝ迚ても人間たる職分を盡くす能はざるほどの弱虫と云ふ事也。唯だ行儀よしと云はれんがため、唯だお育てがらと云ふ異名を受けんがため其子の運命として哀れはかなきものとならしむるは如何にかなしきことなるぞ。

余はかゝる敎育を施こす父母を名けて其子を牡蠣たらしめんとするものと云ふべし。何となれば何の悪戯もせず動きもせざるものは牡蠣にしくものなければ也。西洋の學者が日本の理想的道德は牡蠣的道德にありと云ふは此の事なるべし。

若し之に反して父母たるものが汲々として休まざる小兒の活動心を利して之に事業を命じ、有用なる遊を命じ、善き事を命じなば悪事は禁止せずして自ら已まん而して其心は活潑にして常に進歩あらん。

科學

小兒の世界

蠅

嵯峨のや主人

皆樣御存の蠅といふ虫は、夏中人をうるさがらせる奴で、猫の糞や、馴の糞なんぞにとまッた足で、晩酌の肴にとまッたり、好心持で睡て居る小兒の顔を、妙にむづつかせて夢を破ッたり度々人を苦め、僅に冬になッてから安息を人に殘して影をかくすが、誠にこまり者です。然し其程澤山何處の家にでも居るのだから、

定めし皆様も其躰の形状も組織も御存でせうが、倘念の爲め私に語らせて下さい。蠅は二ッの羽と二ッの目を持て居ます。此目は肉眼で見れば二ッの目ですが、顯微鏡で見ると無數の小さい目から成立て居て、其形状はとんと網の様です。彼の



口は如何様作方のといふ、と口からは管口といふものが出で居て、其で飲物を吸ふのです。若し又固物を見附た時は如何する歟といふ、と奴様管口から唾の様な露の滴を吐出し、其で固物を氣永に解かすのです。蠅が砂糖に解すのなぞは、皆其傳です。蠅の躰には躰中に極めて細い、肉眼ではやッと見える様な條が有り又其二ッの羽は、實に透明る様な薄いものです。

夏になると群を爲して飛んで歩きますが、先生何處から湧出るかと申す、と餘り人の見た事のない、と言て別段六日敷所からでもない、馬小屋や藁小屋の様な總て塵芥の中からて、其處が彼の故巣です。

先づ始め卵から一ッの虫に變じ、虫から螟蛉に變躰り、螟蛉から蠅に變躰るのです。一疋の蠅が數百千の卵を産むといひますから、其が盡く首尾好くかへッた日には、其こそ大變、人は蠅の爲め惱殺される程でせうが、造化は又不思議に之を退治する動物を造て置きました。其は家鷄や雀や雲雀や其他の小鳥で是等がまだ卵の中、虫の中、又蠅になッてから。どし／＼と退治てくれます。其に第一は寒氣です。寒氣には蠅も叶ひません、一も二もなく兜を脱で陣門に降參です。

蠅は甚だ巧に如何なるすべる所をもはひまはりますが、之は彼の脚掌には小さな枕があッて、其で其滑

かな所へさし込むからです。天井を倒にはふのも矢張其理です。

蝸　牛



蝸牛は濕ぽい庭や、野や、藁小屋や、壁などに居るものだが、試に之を捕へてよく見て御覧なさい、第一諸君の目に入るものは、石灰から造られた螺線形の家でせう、此家を蝸牛は背負て居るのですから、實に力のあるものではありませんか、此螺線貝は、一方の端の細く尖て居る方は口が塞がつて居て他の片々の端が大きく開て居りませう。而して諸君が手に御捕なさるや否や、彼は身を家の中にかくして仕舞ッて、唯中頃に何だか軟かな滑かな物が見える丼、更に其を指の先で突て御覧なさい、彼は愈身を縮めて、益深く貝の中へ隠れやうとします。其處で靜彼を地上に置き、少し身を引て、氣長に待て居て御覧なさい、蝸牛安心して、少し宛躰を出しかけます、初め先づ軟かいねばり氣の有る樣な頭を出しますが、其端には四ッの軟かい角が有りませう、是は矢はり探手といふのです。探手の中の二ッには黒い點のあるのが有ませう、是は彼の目です。頭に續て蝸牛は身を現はしますが、是を總躰蝸牛の足と申します。此足に依て彼は、或は木をはひ、垣をはひ、木の葉などをはふのです。

螺線貝は蝸牛の背に附着て居ますが、螺線の上の一端、即ち尖ッた方の一端が、蝸牛が卵から孵化るや否や身と共に生ずるので、彼が生長に從て螺線形に貝も生長のです、何故なら蝸牛は螺線的運動をするからで、螺線的に前に進むからです。蝸牛の身は頭と足とに分

たれ、然も全躰極めて軟で、如何なる形にもなり得られます其故動物學では彼を軟躰動物として數へて居ます、蝸牛は卵を産で其種族を増殖させ、又植物で身を養ひ、而して石灰を作ります。彼等の中ある者は湖水の邊、ある者は海の邊、ある者は河の邊と種々の所に住んで居るが、孰れも家の邊りに住む者と異はありません。

史談

ラム家の連珠

讃美生

自ら克つとを知らざる不健全なる文人多きと、輕々しく文人に身を寄せんと欲するもの丶多きと、是れ現時の著しき現象なり、此時に當つてラム家の姉弟を傳す、豈に無意味の事業とせん哉。

メリーラムの名は、其弟チヤールスラム、及ひ、姉と弟交々其身を相獻じたる美しき友愛の聯想なくしては憶ひ起すこと能はず、メリーラムの弟チヤールスに於ける正にドロセアの兄ヲルヅヲルスに於けると、時を同ふして英國文界の双美と謂ふべし。

妻は夫に身を弄つべし、親は子に身を弄つべし、是れ人情の自然に出づるもの。何の難きとかあらん。獨り兄弟は他人の本にあらずや。人間分争の根にあらずや。分争は兄弟自然の情にあらずや。世の兄弟なるものの、如何に其の利己主義と云ふ武器を揮ひて、相闘ふかを見よ。此間にあつて、獨り能く自己に克ちて、兄弟相殉すると、ヲルヅヲルス氏の兄と妹の如き、ラム家の姉と弟の如き、以て世界の誇とするに足らざらん哉。然してヲルヅヲルスの家に在つては、猶ほ取る者の男兒にして與ふる者、女兒たる獻身の常例らしきを免がれず。獨りラムの例は之に異なり。人生の朝に於

て、戀愛を棄て、情人を弃て、其の生涯の歡娛と慰籍を弃て、金錢を以て買ふべからざる修業の機會すらも拋ち棄てたるものは、即ち弟にして、渠、チヤールスは實に姉の爲に身を獻じたるなり。世に是の如き處り難き際に處つて、是の如く尊とく殉身を用ひし渠が如きは、千歲の後と雖ども、豈多く得べけん哉。渠等は作家林中の連珠なり。二人の文は固より文界の珍なりと雖ども、然れども其の美なる生涯の不朽なるには如かず。『散文セキスピア』は磨滅する時代はあらん。然れども二人の傳記は、兄弟と姉妹とある間、翻へさるべし。

ラムの家は貧しかりき。其父はインナーテムプルの裁判官に書記とし仕へて、若干の收入を得にき。渠が始めて其妻に生ませたるは、ジョンと呼ぶ男兒にて、メリーは其次に生れぬ。實に一千七百六十四年なりき。然れども、愛憎は親の子を視る當時の習なりしかば、父母の愛は總領ジョン一人に鍾まり。その甘き舌は渠をして小兒として小き利己漢子、大人として大なる利己漢子として生長せしめたる間に、其の無慈悲なる手の常にメリーに向つて、擧り、遺傳に由れる癲狂の血を激し昂からしむるとを識らざりき。彼は其祖母の彼を叱る口癖を記憶するに及べり。曰く、『メリー、手前の頭なぜ左樣焰へて居るのだ』。此かりしかば、メリーは弟チヤールスの生るゝまでは、唯家庭の陰に埋もりき。母のチヤールスを彼に生み與へしは、彼が十一歲の時なりき。彼はこゝに、始めて生涯の目的と伴侶を得たり。彼は嬰兒の姉として、守子として、伴侶として、最も多く母として愉快なる面倒を取りにき。メリーの敎育は僅かに父の主人なる、裁判官の書籍館に遊ぶとなりき。是は宏大なる室にて、古き典籍堆積せられ、撰むとなく禁ずるとなく、抽きて讀むに任かせければ、彼は此の文庫に於て、始めてセキスピアと相見

しならん。千七百八十二年、チャールス七歳にて、メリー十八歳の時、チャールスはブリユー、コート學校に上り、こゝに始めて詩人コレリッヂと生涯の交誼を結びぬ。

此時に當つて、父は既に老衰して事に任へざりしかば、收入は次第に減じ、一家の事情次第に窮まりぬ。長兄ジョンは此時既に南海商會とか稱する、會社に地位を占め得て、多少の收入を得たりしかども、浪費すべき金錢を有するも、家計を助くる金錢を有せざる無頼漢なりしかば、獨父母の其の播きたる種を苅るのみならず、生活の苦は憐むべきメリーに及びぬ。彼は實に晝も夜も休みなき針先にて、辛うして一家の匱乏を補ひしなり。然れども、父の機能今は殆ど銷盡し、終に家に老ゆべき時至りしかば、一家の浮沈はチャールスの弱き肩にかゝれり。渠は十五歳にして學校を退き、兄の周旋にて亦南海商會に雇はれたりしが、後印度商會に仕へて、七十磅の年俸を享け、ラムの家是に由つて小康を得しが、千七百九十五年チャールスは俄然狂疾の襲ふ所となり、養育院に入りしかば、メリーの窘窮知るべきのみ。チャールスは彼の唯一の柱にて、又唯一の慰籍なりき。その一時養育院に入りしは猶ほ忍ぶべし。彼を先づ襲はんと期したる遺傳病、先づチャルースを襲ひ、其倚頼したるものゝ、前途、常に伏兵の待つあるを告ぐるを如何せん哉。彼は之を思ふ時身は衣の内に震ひき。チャールスは是の如し、父は老ひて二度目の小兒となり、母は是より先き、久しく既に不隨の身となり、一人の叔母ヘッチーは生計の苦に順着せずして、終日祈禱文のみを讀誦せり。メリーが相談相手は唯、兩個の纖腕と、一本の針とあるのみ。其の困窘想ふて識るべし。

既にして、チャールスは癒へて、養育院より復り來るや、患難は再び渠の順番なりき。長兄ジョンは重大な

る打擊を蒙り。其の嘗て養はざりし家に養はるべく、跛ひく〳〵歸り來れり。幾もなく（千七百九十六年の九月）メリー發狂し、卓上の匕を奪つて、母の胸間に刺し通して死に到らしめぬ。哀れなる老父は、起りしとを辨ぜざるまでに感覺を喪ひ、ヘッチー叔母は腰を拔かし、ジョンは徒らに跛ひく〳〵迂路つきぬ。メリーの手より匕を奪ひしはチャールスなりき。されどメリーは其の奪はれんとする匕を揮ひて傍なる父を傷つけぬ。一場の光景の物凄きと、筆の盡くべくもなきほどなりき。然れども、纔かに癲狂より脫したるチャールスは、其際に處して毫末も心を擾さず。其施せし所の處置を觀るに、悉く施すべき處置に出でにき。此の悲劇の起りし後五日、そのコレリッチに贈れる書は渠が如何に軟かなる勇氣に富めるやを語る、曰く『神は我が感覺を返し玉へり、我は飮み、食ひ、然して眠り、是非を誤らず。我は信ず、無難なりと、然るに我が姉は父に輕傷を負はせ、我は彼と叔母の看護人たる位置に立てり、往事は既に我が前に過ぎぬ、我は感ずるとよりも爲すべき事を有す』と。

自克の意紙上に溢る。然して渠の患難の壓力を一身に感ずれば感ずるほど、天の自己に屬する大任を自覺すると、愈益深きを致せり、渠は謂へり、若しも我、堅忍なる意志の力を以て、自ら克つにあらずんば、我が理性は動搖せんと。弱き渠は茲に一倍の氣力を增し來りぬ。この後數日、渠がコレリッチに與ふる第二書に曰く、コレリッチよ、語るは頗ぶる異なりと雖、纔に同じ病より醫されし我が、此の怖るべき日にあつて、震慄すべき光景の中にあつて、傍觀者も知覺を喪ふべき悲劇の舞臺の上に、己れをして平生の沈靜、（絕望にあらず）、を維持せしめ玉ひし神は讃むべき哉。此際にあつて、最も我を扶持せんものは、我が宗教心なりと主張すると、果して褻す言なるべき乎。我は悲むべ

きの事よりも、爲すべきの事を有することを感ず。此日の夕、憐れなる我が父は、其の愛する女に受けたる傷の上に頭垂れ、叔母は感覺を失して死骸の如く臥し、冷へて言はさる。母の死骸は、別室に横はれり。我は其中にあつて、不思議と思ふほと、扶持せられぬ。其夜終に目を瞑ぢざりしかど、恐怖を懷かず、失望を懷きて、其日より後、一夜も睡眠を誤らざりき。我は一家族の重荷、我が上に壓し來るを感ず。何となれば、氣の毒なる我が長兄は、此時以後、頗ぶる親切なる人となり、兄弟らしくなりしと雖。渠は歡娛に習ひて、苦役に習はず。且つ其の恐しき足は、渠を人世の義務を脫せしめたればなり。今は唯我一人あるのみ。』以て其意志の力の、如何に發展し來れるかを觀るべし。

渠が其姉の爲に殉するの心、亦此時に胚胎せり。渠は前の書に於て云ふ。『我が憐れなる姉、——不幸なる、無知覺なる樂器は其感覺を恢復せり。』渠か此の闇黑なる、メリーの心竅の祀に、一點の光を看出したるは是なりき。又曰く、『メリーの精神の錯亂是の如く太甚なりと雖、彼の强靱なる心の力、能く自から發揮し來るの時なるを信ずと、是れ渠が認めし二點の光なりき。又曰く、我が見たる世の女の中、利己的趣味の淡泊なると、我が姉の如きは稀なりと。嗚呼是れ渠が其の病める姉の衷に看破したる第三の光にして、然も渠が全世界を照すの光は是なり。弟を育てしものは姉、然して姉を知るものは弟、渠がメリーの爲に身を献ずるに到りし消息、誰か此中に求むべからずと云ふや。

既に身を献ずとすれば、盡く其の身邊のものを犧牲たらしめざるべからず。犧牲にすべき凡てのもの丶裡、最も哀痛すべきものは戀愛を犧牲にすることなり。此時渠はアリスと呼べる、美なる女に媚び、二人の戀愛業既に熟したりき。渠はこの戀愛を絕たざるべからざりき。之を絕つには非常の痛苦を要せざるべからず。然

れども渠は終に之を絶てり。渠は身一たび養育院に在り、看護者の病めるもの手に、足に、鎖を懸け、之を木に壁に繋ぎ、手に鞭を以て、渠等を笞つことを事とし、口に入るゝものは、パンと水の外、一滴の乳、一塊の肉だに與へられざりし苦しき經驗を甞め來りしかば、渠はメリーを養育院に還つて無慈悲なる慈善に委棄することを欲せざりき。家にあつてもパンと水の外、一滴の乳、一塊の肉を與ふること能はずと雖、鞭の苦を免るゝのみにても多とする所なりしかば、遂にメリーを家に看護したり。其の間に、父は世を沒りぬ。チヤールスは益メリーに注意しぬ。慘酷なる遺傳は復たびチヤールスを襲はれざりしかども、メリーには終まで伴ひき。然れども注意して其危險の結果を豫防したりしかば、又甚しき危險を生ざりき。且つメリーは常に或る、徵候に由つて遺傳の激發を豫言するを得たりしこと、不幸の中にも幸なりけれ。渠の友は傳へり。其の休息の日は、手を捉つて近郊を散策しつゝ、渠等が養育院に迎ひて、痛く聲を揚げて泣くを見たりと。』

獻身は獻身を以て報はれぬ。メリーの全く快復するや、其の全心を擧げてチヤールスの事業を助くることを自ら矢ひぬ。不幸にして彼は中心母の記憶の爲めに苦しめらるゝを免れざりき。何人も其沈着なる容貌の上に、彼の悔恨の傷を讀む能はずと雖、然れども其傷は療されたるに非ずして隱されたることは、彼が數十年の後、告白したる語中に見えたり。曰く、『君は之を知るまじけれども、我が親愛なる母の槪念の、我が頭と胸にあらざる日なし』と。或る折、彼の甞て母に就て語らざる所以を、その愛する兒童に問はれし時。之が返辭は痛苦の叫なりしとなり。

かくて交ゝ相殉じたる二人は、恰もチルヅチルス兄妹、一つ田園に耦ひ耕したる如く、筆を執つて一つ卓子に耦ひ耕しぬ。メリーは燭を秉り、チヤールスは事の始

より終まで何も出來ぬ。」と呻きつゝ、終りに至つて始めて一事の成れるを看出すか癖なりき。メリーの文學上の聲名は、『セキスピアの散文』、及び『レイセスター婦人の學校』と標して小兒に讀まする、美なる短篇の文集なり。『散文セキスピア』の如き好著の、全然貧の壓迫の下に成れるは不思議と云ふべし。『散文セキスピア』の中、六大悲劇はチャールスの手腕に成り、餘の十四劇はマリーの筆に翻へされたり。渠等の目的は悉く劇詩を物語に翻へし、童兒の理解に便ならしむるにありき、其特質は文躰の流麗なると、劇詩の上に活きたる人物と、舞臺に對する批評眼の精到なるにありき。文成つてヰリヤムゴトヰンとか云ふ一出版者の手に附せられたり、チャールスが親から『女の敵』と稱する惡名を蒙りて、出版者の妻を惡口したるを見れば、其の著述の蔑視せられたること、コドヰンの妻の俗人たりしことを推量すべし。然れども出版屋に不入望なりし散文は、非常の人望をもつて、讀書社會に歡迎せられ、立どころに數版を重ね、今日に至るまで年として『散文セキスピア』の新版の出でざることなし。

是等の外、メリーの筆の產物の中、最も愛誦すべきものを、其手簡となす。嘗て其の弓に一弦以上を有せる(弦を以て情人に喩ふ、此れ方言なり)妙齡の婦人より結婚に關する質問を受けし時、彼は答へて、『人の品性に注意するの秘訣は、其の品性以外に動かんとを望むなかれ。如何なる場合にも己の欲する所に出でしめんと望むなかれ』、と曰へり。如何に多くの實用的知識の此の中に含蓄せるかを覩よ。千八百〇五年、ヲルツヲルス兄妹が、兄弟ジョンの溺死に遭ひて悲哀の裡に葬られし時、メリーはドロセアを慰めて曰く、我は『御身の手書に接するまでは御身に書かん勇氣なかりき。我が願ふ所は、御身の此くまで美しく描き玉へる亡き

人の幸なる、記憶の、安らかに定まるの日あらんことを御身に告げんとにありき。然れども悲しめる人の心に我が言の冷かなりとせられんことを恐れて敢てせざりき。されど他日御身の亡き兄弟を透して、凡ての物を見んと欲し玉はんと、及び、此事を以て永く御身の慰籍の源と爲さんと欲し玉ふべき事を、我は悲しめる時の我か經驗に於て之を學べり。されど、御身自から是事を感じ玉ふまで、我は敢て之を言はざらん。』此くも明瞭なる頭に、此くも闇黒なる妖雲の伏せりとは、如何に痛嘆すべき事なるぞ。ドロセアの返簡、到着する時、メリーの心は既にメリーのものにあらざりき。チャールスはメリーに代りて答へぬ。『我は柱を失へり。我があらゆる力は失せぬ。彼の協同を喪ひし我々殆ど痴人の如くなれり。我は敢て思想せず、悪しく思想せんとを恐るればなり。我は今にして益彼の我が爲に活くるものなるとを識る』と。

其のチャールスのメリーを信じ、メリーに倚ると此の如し。是れチルヅチルスがドロヒアを贊して、彼は我に目を與へ、耳を與へ、情を與へ、思想を與ふと云ふと、焉ぞ彼是あらんや。ドロセアがチルヅチルスに詩神たしりが如く、メリーはラムの詩神なりしなり』。渠等は二人かくして生き、此くして作らきぬ。メリーはチャールスの早世に比すれば甚だ長壽なりき。彼は一千八百四十七年七十三歳にして世を沒りぬ。

文藝

ドラ

湖處子

嗚呼是れテニソンの最も美なる短篇の一なり。文字に拙なき余輩後學、焉ぞ大家金玉の文を譯すと云はんや。其この意を讀者に紹介し得ればこれ既に多幸なり、豈に之より以上を望まん哉。

農夫アランの田園の處に井リヤムとドラと同じく住みけり。井リヤムは渠の子にて、ドラは渠の姪なりき。渠は數々二人を視て謂へらく、以て夫妻たらしむべしと。ドラは伯父の意を躰し、井リヤムに慕ひ寄りしかども。少年は常に居を共にしたるが故に、微かもドラの事を思はざりき。

時到りしかば、アランは其子を呼んで曰く、『吾が子よ、我は晩く妻りしかども、死せざる前に孫をば膝にせんとを願ふ。この故に心を汝が配に留め、隨つてドラを視てあるに彼は觀るに美はしく、然も又年よりもませたり。本と彼は我が兄弟の女にて、渠は我と嘗て相諍ふとあり、後別れ、後外國に死にたり。我は渠が爲に其女ドラを養ひしが、今之を汝に妻り得しめんとす。蓋は我れ日夜此の事を思ふと、數年なりき』と。然れども井リヤムの答は短かりき。『我は死すともドラを妻る能はず』と。

老人は色を作し。渠は其手を重ねて曰く『死すともドラを妻らじとか。汝は爾く答ふるとを敢てするか。然れども父の言が今日も猶ほ律法にて、今我が言も亦た然り。退ぞひて之を思へ、之を慮るに一ヶ月の猶豫を與へん、然して後我が願ふ所に應へよ。然らずんば我を造り玉ひし神に誓つて汝を逐ひ、決して復た我が處を煩はすとを許さず』と。然れども井リヤムは無分別に之に答て脣を噛んで、自暴し去れり。是日より渠はドラを見れば見るほど彼を厭ふの念を益し。彼を遇すると暴虐を極むるに至れり。されどドラは柔らかに之を忍びき。一箇月過ぎ去りしかは、井リヤムは父の處を出て、自から耕すべく田園を借り、戀半分、恨半分、メリー、モリソンと呼ぶ、一農夫の女に口說けり。

二人が結婚の鐘、會堂より響く時。アランは其姪を呼んで曰く、我は猶ほ能く汝を愛す。然れども汝若し嘗

て我が子たりし渠と言ふか、若くは渠が妻と呼ぶ女と語を交る如きとあらば、我が廬は最早汝のものならじ。之を記せよ、我が言は律法なり』と。ドラは心柔かなるものなれば、之を誓ひき。彼は謂へり、『是事必ずあると能はじ、伯父の心必ず易らん』と。

日は邁み。井リヤムに男生れぬ。然して飢饉は渠に莅めり。心擾れたる渠は父の門前を過ると旦又旦。されどアランは之を助けざりき。獨りドラは些にても其の蓄へ得べきほどを蓄へ、伯父の目を偸んで之を渠等に餉れり。二人も亦この誰が餉るかを識らざるほどなりき。終に井リヤムは熱を捕へ、收獲時分に世を沒りぬ。

其時ドラは往てメリーを見ぬ。メリーは坐して、孩兒を看て涙をうかめ、ドラを見て震慄したりき。ドラはメリーを見て曰く、我は今まで伯父の言に順ひたりき。然れども今は我之を犯して來れり。何となれば最初此患の井リヤムに起りしは我あるに由ればなり。然れども願くは過去をして過去を葬らしめよ。我は今、亡くなりし人の爲めに、その擇みて妻りし御身の爲めに、及びこの孤の爲に來れり。五年の間野に滿作なかりしとをば我も知れり。我をして此兒を取らしめよ、我此兒を圃に伴れゆき、伯父の眼の見ゆる所に置かん。然かせんには伯父の滿作を喜ぶ心、それ或は此兒を見て、亡き人の爲に此兒を惠まん。

ドラは嬰兒を抱き上げ、往て小麥圃を横ぎり、畔の上に坐れり。こゝは種播かざる處なれば、罌粟多く生ひて花さきぬ。アランは遙か離れて野を過ぎしかば、己を待てるドラと嬰兒を認めず、渠の僕も亦一人として敢て之を告ぐるものなかりき。彼は起ちて渠に適かんと欲ひき。然れども彼の情、彼を誤まりて果さゞりき。人は刈り、日は沒り、野は凡て冥くなりぬ。

然れども夜の明けし時に、彼は起て今一度嬰兒を抱き

て畔の上に坐り、邊に匂へる種々の花を摘み、これを小き冠に編むで、之を嬰兒の帽子に結び附けぬ、伯父の眼の見て之を樂しむく。野に入らんとするアラン之を認め、僕等を作事に殘し置きて來て曰く、『昨汝は何處にありや、この子を誰の子とかする、汝こゝに何をかなせる』。是に於てドラは首を垂れて地を見、恭しく答へ曰ふ、『是は井リヤムの遺孤なり』、曰く『渠等に關せざる樣、我が汝を禁じ置かざりし乎。』曰く『おん身の思ふ如く我になし玉へ、されど此子を取り玉へ、亡くなりし人の爲に、此子に恩を施し玉へ。』曰く『嗚呼、こは汝と、かしこなる女と計りて演ずる狂言と見ゆ。されど我は我事を終へざるべからず。汝は既に我語の律法なるを知る、然るを敢て之を輕ぜり。可し、我この子を取らん、汝は是より此處を去れ、決して復た我を見ると勿れ』。かく云ひつゝ渠は嬰兒の手を執れり。嬰兒は聲を揚げて哭き、辛うじて蹣めき歩めり。花の冠はドラの足許に落ちたり。ドラはその兩手の上に伏し沈みぬ。嬰兒の聲は次第〳〵に遠かりつゝ、野により聞えぬ、彼は彼が頭を土に垂れ、始めて此處に來りし日より、今日に至るまで、ありし事ども憶ひ出でつゝ、獨り聲を飲むで泣きぬ。人は刈り、日は沒り、野は凡て冥くなりぬ。

其夕ドラはメリーの家に返り、戸の入日に佇みぬ。メリーは我子のドラと偕ならざるを見、寡居の重荷を取り去り玉ひきとて、聲を揚げて神を美めぬ。ドラはメリーに對て曰く、伯父は御身の兒を取れり、されどメリーよ、我が今より御身と共に活くるを容せ。伯父は我に再び渠を見るべからずと云へばなり。其時メリーは答へて曰く、『此事決して之あるべからず、もし之あらば我が重荷を汝に歸するものなり。今我れ願ふに、渠我兒を取るは可からず、恐らくは渠は我兒の心を頑

にし、その母を卑ましむるに至らん。かるが故に、おん身を我と與に往き、我と我兒をば取り反し、御身は家に呼び返さるゝ樣渠に乞はん。斯くても猶御身を呼び返さしとならば、其時二人一天井の下に住み、ヰリヤムの孤の爲に作らき、その生ひ立つて二人を助くべき日を待たん。』

是に於て二人の女は抱き合ひて接吻し、與に出で立ちて田園に至りぬ。往きて廬を傾ふに、戸の鉤は外してありき。彼等は内を窺ひ、アラムが嬰兒を膝の間に夾み、腕に其の小き首を倚らせ、其の小き兩手を捉つて拍たせ、或は頬を叩かせなどし、嬰兒も亦快よげに兩足を投げ出して、渠か袂時計より垂れ懸かれる、黄金の印を仰ぎ見て阿呍しつ、祖父と孫兒と相愛する者の樣なりき。其時二人は内に入りぬ。嬰兒は母を見て、母の方に手を差し出して泣きぬ。アランは嬰兒を地に放てり。メリーはアラムを見て曰く、父よ——父と呼ぶヿを許し玉はゝ——、我は己れの爲め願わつて來りしにあらず。ヰリヤムの爲にも、この子の爲にもあらず、我が來りしはドラの爲なり。彼を家に取り回し玉へ。彼は猶能くおん身を愛せり。然して父よ、ヰリヤムはその眠るとき、世の人の如く平和に眠りぬ。何となれば、我が渠に問ひし時、我（嗚呼我身ほど苦勞女はあらじ）、我を妻りしヿを悔ひずと答へたれば。されど父よ、渠は父に背きしヿを悔ひ、臨終の際なりき。願くば神我父に恩を施し玉へ、願くば渠我受けし患難を知らざらん事を』と、かく嘆きて、面を背け、然して亡くなりぬ。我が幸なきを思ひ玉へ。されど父よ、我子を我に返し玉へ。恐らくは御身渠が心を頑にし、渠をして其父の紀念を卑しましむるに至らんヿを。故に我子を我に返し、復びドラを取り反し、凡ての事を、昨日の如くならしめ玉へ。』

メリーのかく語れる間、トラはメリーの背に面をかく

しぬ。戸の中に少らく言ふものなかりき。老人は俄かに嘘欷あげぬ。『嗚呼我過まてり。我過まてり。我は我子を殺せしなり。我は渠を殺せしなり。さりながら我は今も猶ほ渠を思ふ。嗚呼我愛子よ。願くば神我を恕し玉へ、我は我過を知れり。女等よ我を殺せ。』

二人の女は、手を老人の頸に捲きつけ、數度渠に接吻しき。アランは悔恨の淵に沈み、然して百倍の愛心を以て復り來りぬ。彼は三たび其孫を抱きて咽びぬ、ヰリヤムの事を思ひつゞけつ。

此に於て、四人は一天井に下に住みぬ、時適みて、メリーは他の男に適きぬ。獨りドラのみ、ヰリヤムの孤を守つて、終りまで嫁せざりき。



家政

談話につきて

蘭芳

伶悧なる教育ある女子にして、人と交際するに往々談話の拙なきに困る者あり。實力よりいへば遙かに吾に劣る者が却て世辭に巧なるを見ては、偖は交際の秘訣は淺薄なるにありと速斷す。誤れりといふべし。かゝる女子は、恰かも五錢二錢の小錢入用の時に十圓五圓の大札のみもてるに等しきのみ。尤もかゝる女子に限りて、或は自ら氣取るの癖あり、聲高にはいはれねど、或は我儘にして人の言をきくを好まず、己れのことのみいはんと欲する癖ありて然るやも保し難し。此談話の巧みならざる一大原因は、家庭に談話術の實行せられざることなり。來客の時はさもなけれど、平生

家庭にありては愉快なる會話をなさず。たとひこれあるも、面白くなすをつとめず。會話の術は追羽根の如し。常に慣らさざれば巧みなり難し。いそがしき家庭にありては、家族集まることは晩食の時位なり。此時こそ、愉快なる會話をなすべきに、兎角主人は外にありての不平をとなへ、主婦は家の不平をもらし、娘は着物の苦情をいふ樣な事あり。是は改む可き事なり。不平をいふには、其時あり、不愉快の食事は、不消化を來す。樂しき笑語に食事をなすは、一升のビットルをのむよりも、遙かにまされり。凡て家庭に於ては不愉快なる問題をさくるのみならず、愉快なる問題をゑらむことをつとめざる可からず。

會話の問題は新聞的なるをよしとす。世間の出來事につきての會話たるをよしとす。多くの人々多くの所と多くの事を知る者は、たとひ其境遇はせまくとも、廣く社會に出でたると同じきなり。會話の種に困る女子は新聞をよむべし。一般の話の種には、新聞雜誌ほどよきものあらじ。其いふ處は時におひて廣く一般に渡れば、此程人づき合に必要なるはなし。廣く一般に渡る話の種は、流暢なる會話に欠くべからざる要素なり。氣質順にして、會話の種あり、滑稽を解するの力あらば、談話の拙きを嘆くに及ばぬことなり。

家内の喜と憂（上）

一、家内の喜は常に消滅せざる樣注意を爲して憂ふるの日に在ても全く消散せしむべからず

二、喜が心情を温むる處には社會的一致と尊敬すべき親睦存して各樂み勇みて其義務のある處を盡す

三、喜は安直なる者にて良好なる心を有するの人なれば如何なる瑣細なる物よりも之を發見し來りて足を知るの人こそ最も喜に富むなれ

四、汝は汝の「ホーム」が喜を受くる様力を盡せ人を愛し敬して各讀ふて其義務を盡す處には喜存在す

五、清潔なる心情は快活なる精神を生ず自ら滿足なる能はざる人には快樂も近き來らず

六、義務を盡し職業を終り從順にあるは「ホーム」に在る喜の王なり

七、過失あらば怒ると勿れ寛大なる美德を知らずして喜を棄つる者こそ過失を慣るものなれ

八、批難し處罰するにも愛を以てせよ愛を以て罰すれば苦き感情を殘留するとなく其過失を忘却せよ汝が舊に復すれば汝に罰せられたる者は其胸中に深く其身の過失を悔悟し益々汝に信賴す

九、毎日「ホーム」に喜を與ふるも時には他に異なりたる事にて之を慰めよ特別即ち日常見もし聞きも慣れざる者等と樂しく又喜ばしき者はあらじ

十、然りと雖ども「ホーム」の喜は能く之を精撰せよ快樂を感じさせさへすれば可なりと誤信する勿れ

十一、不潔なる源泉より湧出する快樂と遊戲は必ず之を避けよ譏謗と嘲罵とにては容易に人の頤を解かしむるを得れども眞に快樂を感じ喜を覺らしむる能はずして一方には輕蔑の意を發せしめ又他の一方には不平と復仇の念を生ぜしむ

十二、汝の「ホーム」を容易に誤道に誘導し去り且「ホーム」の空氣を汚濁するが如き遊戲と快樂は顧みると勿れ

十三、「ホーム」の快樂は注意して養護せよ何となれば他に生活の感情に深く適するものあらざればなり

海濱の家庭（漁民夏の生活）

漫遊生

余は房總地方漫遊の目的を以て、本月始め我家を出立しぬ、蓋し此行家族を率ひ海濱に二三週間の生活を試

みんと欲したれども果さりしければ、余は單獨行李を調へ拂曉靈岸島なる房州行滊船家に行きたるに乘客麕集せり、余は其宿に就きて船賃の種類を尋ねたるに下等のみにて上中下の區別なく、館山及北條まで廿五錢なり、余は加知山に上陸し、こゝに暫時滯在して馬琴の稗史八犬傳によりて有名なる富山、若しくは房總の界に立ちて矗々天を刺さんとする鋸山、若くは眺望の奇絶を以て名ある伊豫ケ嶽に攀ぢ、若しくは高崎鑛泉に浴せんと欲しゝかば、同所までの船賃切符(廿二錢)を得て、午前六時過一同の乘客と共に、端艇に乘りて『十號』といふ滊船に乘り組みぬ。

船は靈岸島を出で濱御殿を右へ見て芝浦に沿ひ數個の臺場の間を過ぎ、鮫州、大森沖は何時の間にやら、やがて羽根田燈臺を間近に見て、午前九時頃には横濱、金澤、横須賀を經て、富津の砲臺近く進みぬ。

富津と觀音崎は東京灣の灣口にして、宛も袋の口の如く兩砲臺より放つ彈丸充分に交叉し得、潮流の出入する所なれば波濤漸く高く、當日風なきに船は上下に動搖しぬ、余は甲板にありて日蔽なる「テント」の下にありて乘客と共に談じ且つ笑ひ兩岸の光景に目を囑せり、婦人客は大低甲板下に在りて頻りに煩悶して嘔吐する物音聞えぬ、(中には男子もあり)これ船の動搖によりて船暈を起したるものと知られ、船員は「ブリキ」製の吐器を持ち運びて忙しかりき、余は此樣を目撃して日本人民が海上に慣れず、頗る海事思想に乏しきを慨しき、此位の海上の波濤を恐れなば、太平洋と言はず太西洋と言はず、少しく日本海に乘り出でなば、此の乘客は吐して死に至るべしとまでに思惟しぬ。

余は斯る思想を起しつゝ船の東京灣を出で、上總の海岸に沿ふて進行する際、眼を左舷に注げば鹿野山は高く海面を抽き、前方には鋸山、山勢分れて數仭を爲し、其形大鋸を天に向けたたるが如く、滿山總て岩角黒色

を呈し驕陽の光を受けて一種の趣を添えたり、余は船側より俯して海上を見るに數十の漁船余等の通路に遇ひ、漁業を試みつゝあり、其漁船を見るに内には男子あり、婦女あり、四五歳の小兒すら加り、一葦の船に一片の板子を弄し余等が陸上に於けるが如く危氣もなく自由自在に運動せり、これ上總金谷附近の漁民が家を擧げて鯵を釣るの狀なりと、余は海濱の日本國民が斯くまでに海上を恐れざるに感じぬ。

同十時過加知山に着したり、端艇にて濱邊に上り直に旅宿に投じ、海水浴、漁遊、跋渉等に一旬を費したり、此間余は漁民の生活を觀て、其安樂世界と自由郷なるに、轉た羨望に堪えざるものありき。

第一に余が眼中に映じたるは生活の安易なるとなり、余は常に紅塵萬丈の都會に生活するものなれば、漁村の光景靜穩にして、所謂苫屋の蔭より藻鹽燒く煙のゆるやかに立ちのぼるを見れば、余が心は頓に海濱の生活を企てんと欲せり。

余は漁民の生活が如何に自由にして安樂なるかをいふ前に、一村の漁民悉く共同の事業と娯樂を爲す現況を記さゞるべからず、余が目擊せし漁村の人は男子も女子も老人も少年も共に事業を同くせり、余は「ぢびき」といふ漁業の有樣を見しに、遠くより船にて網を兩方より濱邊に引き寄せ、次第〳〵に波打際に網を絞りちゞむるに銀鱗金尾潑溂として淺海に躍るを見れば、漁民は家を空にして走り出で、女も小兒を網綱に取りつき共に力を合せエイヤ〳〵と濱邊の方へ引き行くなり、其狀傍に見る目も壯快に堪えず。

此邊の漁民は一家擧つて一舟を大海へ乘り出し、漁業に數日を海上に送り、或は數家の漁民隊を組みて遠征に出懸く、素より妻も娘も、赤兒も伴ひて。

海上に出でゝ一日の業を終り濱邊に歸る時は、漁民は家より立ち出でゝ驩迎し、船を水なぎ砂上に押し上ぐ

るにも我も彼の家族も共に共に力を合せ、船を出す時も彼我の漁民家族共力して砂より水上に船を押し御す、其狀各家の家族自他の區別なし、一村の漁民は殆ど親類の關係あるが如し。

彼等は共同一致、一隊を組みて鯨、鮪、鮫などの大魚を捕へんと遠く海洋に出で、獲物あれば其獲物に定りたる相圖の旗(たとへば十圓には何色、五十圓には何色、百圓には何色)を漁船にひるがへし、其本營なる自己の濱邊に凱旋するや、濱邊にては其旗色を認めて、歡喜雀躍し、手を拍ち聲を放ちて驩迎す、其光景眞に戰場より凱旋したる武士を迎ふに髣髴たり。

彼等の家庭敎育を察するに、彼等の子弟は悉く漁民たるの資格を養はるゝなり、余は同宿の一客と共に一舟を僦ひ漁夫二人を率ひ、加知山灣の前面に四面削るに似たる浮島(浮島は加知山灣の一奇觀にして島狀は宛歷鉈の如く、濱邊より此島まで三十町、島の周廻七町許、斷崖突兀として海中より起り、四面削るに似て容易に攀ち登ること能はず、崖上縞竹と椿樹繁茂し、其間に兎兒のチラ〳〵姿をあらはす、余等頂上へ登りて四面を臨むに風光絶佳、言語の盡す所にあらず、曾つて我海軍省にては此島を倔强の砲臺とせんと高千穗艦其測量を試みたるに餘り海岸に接近せる故を以て砲臺となりて天然の風流を沒するの厄を免れたりと、幵幸ひなるかな)の近傍に船を浮べ綸を垂れて小魚を釣り、或は「モリ」を擧げて鯛、黒鯛の類を刺す、海は深きこと五六尋にあれども、海水碧くして瑠璃の色を爲せる間に、大魚小魚群を爲して游泳し、其狀淺水の魚族を見るが如し、余は綸に飽けば板ガラスを底に嵌めたる一函を海面に浮べ、舷側より魚族の來るを熟視し、右手に「モリ」を摑みて刺し試むるに游泳せる魚族は、手先狂ひ且つ的定まらず、一尾すらも獲る能はず、漸く海底の岩角に天蓋の如き脚を延ばせる蛸を刺し止めた

り、水面より見たる所は左もなく思ひしに「モリ」にかゝりて船に引き上げらるゝ所を見れば、頭は赤兒の頭よりも大にして八脚亦之にかなふ、此時の快感言ふべからず、然しながら余は唯此奇巧を奏せしのみ、他に一尾を得ることを能はざりき、余が連れ來りし漁夫の一人は其孫なる四五歳の男兒をも伴ひ來れり、其男兒は魚類を刺すこと眞に巧妙にして、十が七八外るゝことなし、中にも余等の感に堪えたるは海中に蜿蜒せる海蛇の躰の眞中を刺したる手際にてありき、海蛇は其色淡褐色にして豹の如き斑紋あり、齒牙鋭利にして人若し此魚に嚙まるゝ時は大害を殘すといふ、躰は鱧に似て丸く細長きものなれば、「モリ」にて刺すこと頗る難事に屬す、たとへ命中するも滑りて肉に及ばざること多しといふ、然るに此兒童見事に其胴中を貫きたるには一船擧つて嘆賞の聲止まず、これ必竟生れながらにして海に慣れしめ、漁に慣れしむるによるものか。

船を浮島の側面を廻はせば、荒浪強く崖下を洗ふ所宛然藍をとかしたる如く濃碧色を爲し、其深さ容易に知るべからず、聞く此處にて已に三四人の死者ありと、余は薄氣味惡く、何となく鬼胎を懷きぬ、其時年老ひける一人の漁夫は其孫なる小兒に此處に一泳せよと命じぬ、小兒は危險なりと老父の命を奉ぜざりければ、漁夫は目を瞋らし「此くれゐの所をこわがッちや手前漁師にやアなれねへぞ」といふや否や、裸躰にて舳の方に蹲踞居たりし小兒を押し落しぬ、余等は老父がおどしか串戯の文句と聞き居たるに、水音高く小兒の水に陥りたる有様を見て、一旦漁夫の心の甚だ殘酷なるに驚きたれども、全く然らず、可愛〳〵の孫を斯くするは獅子の谿間に其兒を蹶落す心と異ならず、余は無學文盲の漁夫社會に、却つて完全なる家庭敎育あるとを發見せり。

濱邊の浪うつ際には七八歲より漸く這々の出來る幼兒

に至るまで海水に浸され、寄せては引き、引きては寄する涙に搖らるゝも些の危險なし、皮膚は澁紙色を爲し、頭髪は鹽をかぶりて雲脂のたかりしが如く、眼のみピカ／＼と耀き、男女の差違なし、余等は一夏二三週間の海水浴を行ひて一年の健康を企つるに、彼等は年が年中海水浴を爲せり、海濱住民の身躰の健康なるも宜なるかな。

房州の海岸は大概遠淺にして一二町海上に進むも尙ほ大人の首邊に至らざる場所多し、余は元來水心なきものなれば成るべく水青く砂白く、波浪の患なき遠淺を擇び日々三度海水浴を試みるも、一寸も自己の首以上の處に進むこと能はず、常に逡巡の色あるに引代へ、漁村の兒童又は女兒等は海上を行くこと余等が陸上を歩すると異ならず、余等の水中に意氣地なきを見て冷笑するが如し、余は實に生來游泳術を習練せざるを耻ち、漁村を去りて今尙水心なかりしを千悟萬悔せり。」

漁夫の家庭は小兒より妻女、老人に至るまで徒手消閑するものなし、一家夫々仕事を爲して日々を送るなり、漁業に連れられざる家族は家に殘りて網を編み、漁具を調へ、或は魚類を籠詰若しくは鹽物として東京に送り、一日寸暇なきが如し、彼等は一家共に共に職業を司り、却つて婦人が男子よりも能く働き、能く勤むるもの尠からず、これを一日爲すこともなく悠々長日を消磨する奧樣方や御孃方に比して其差幾千ぞや、健全、和樂、幸福慥に漁民の家庭にあり。

漁民の生活は眞に安樂なり、眞に自由なり、自治自營にして他人と政府の牽制なく、又或點までは窮屈なる道德の制限なし、彼等は大抵裸躰の生活なれども怪まず、一家一日勞働の汗を一風呂に洗ひ流し、妻子相集りて濁六を傾け、放歌高吟興盡きず、斯の如くにして勞働し娯樂して日々を送る、彼等の生活も亦無邪氣なるかな。

小兒の言語

或る佛蘭西婦人博聞強記を以て名あり、殊に語學に通ず、婦人獨國伯林に行き、瞬間にして日耳曼語を攻めんと先づ字書により名詞動詞を記憶し、會話書によりて大概の會話を心に藏め、會話教師を一番驚かし呉れんと講堂に入りしに、教師の語を解する能はざるのみならず、自己の意思を言ひ顯はすこと能はざりき、婦人大に耻ち今度は一週間にして字書にありとあらゆる詞を記臆し再び講堂に入りたるも尚ほ會話の要を得ざりき、婦人再び大に耻ち、如何にもして此耻辱を雪がんと苦慮せしが、其宿の庭前に遊び戯るゝ四五歳の兒童等を見て彼等は何故に學問なく研究もなく四五年の間に能く國語を解し且つ談話し得るかといふに心をつけ翻然悟る所あり、それより字書を抛ち、會話書を抛ち、講堂へも上らず、二三ヶ月の間彼等兒童等の仲間に入り、彼等と談笑遊戯の間に見事に日耳曼語を自由自在に談話するに至りたりとぞ。

小兒は外界の實物に觸れ、其直覺によりて事物を認定し得れども、之を言語に發すること容易ならざれば、三四歳までは啞の如き觀ありと雖も實は其三四年の間には耳目に觸れたるものは大抵感得し得れども、之を言語に發すること能はざるのみ、故に兩親たるべきものは、成るべく簡易に、成るべく高尚に、成るべく明白に兒童の言語を開誘する方法を務めざるべからず、何となれば兒童の時一語にても多く言語を開誘すれば、一語よりも多くの智惠を進むればなり、兩親の實物教育（學校又は會話書に依らざること）宜しきを得ば學校又は書物よりも多くの好結果を得るに難からず、前の佛蘭西婦人が、學校及書物に失敗して、小兒社會に仲間入して好貭の結果を得たるは右の理由に外ならず。

さて言語を開誘するにつき注意すべきことあり、我國は於ては小兒の言語各地方に依りて一定せず、英米にては父母を呼びて「パッパ」「マムマ」といふは誰も能く知る所なるが、我國にては「トヽサン」「カヽサン」といふ地方あれば「トウチヤン」「カアチヤン」といふ所もあり、又は「トヽヤン」「カヽヤン」といふもあれど是等は寧ろ語の品位にかゝる問題なり、然るに東京などにては小兒には小兒の通用語あり、名詞を言へば脚を「アンヨ」腹を「ポン〳〵」、魚を「トヽ」、團子を「イシイシ」（此類澤山あり一々記するに遑あらず、）動詞を言へば上ることを「アンガ」、下ることを「オンリ」、坐ることを「エンコ」、歩くことを「アンヨ」（此類も澤山あり）といふ如き、勿論兒童の口には言ひ易かるべし、併しながらかゝる言語は成長の後有益なりや否や、田舎より東京に出で、住居を爲せる細君などは不便の事尠なからず、田舎的小兒通用語を以て言語を開誘せば、東京にて成長する兒童に不便あり、それかと言ひて父母は東京語を知らざれば止むなく田舎語に依るに外なく、其兒童は其家庭の田舎語と近所にて觸るゝ東京語と混淆せるもの多く見受けらるゝなり、此場合に當り吾人は寧ろ正しき言語を以て兒童の言語を造らんと欲す、正しき言語とは何ぞや、則ち脚は脚、手は手、腹は腹、座ることは座る、歩くことは歩くと敎ゆるに如かず、これ學校に入りて後正しき國語を學ぶの助となればなり、吾人と同感の母親多からんと信す。

手藝案内

造花術

撫子と桔梗



今や七草の時候となりぬ、吾人は前號に於て造花術の大略を案内し終りたれば、これより時候物の撫子と桔

梗の造花の大畧を記すべし。

撫子花の造様は、

蘂——白のカタン糸六七條の山吹の心などの碎きしものをつけ、それを銅線へ結びつけて蘂とは爲すなり。

瓣——實物により瓣の形に切りて實物の撫子の瓣の如くにギザ〳〵を其端に剪刀にて隨意に切り、われ目を造るべし、布帛は羽二重、寒冷紗など宜し、色は大低赤なり、花の心は濃色なるものなれば心より筆にて瓣の端に幾條となく線條をゑがき、實物通りに塗るべし、花心は線條幾度となく重なりて自ら濃色となるなり。

蒂——蒂は色紙を適宜に刻みて五條と爲す。

葉——豫て葉染にしたるキヤラコを其型によりて細く切り出し、銅線に青紙を捲きしものを裏よりあてゝ葉筋を出し、それを幹にまとむ、但し葉の表へは胡粉を些少刷毛にて輕く打てば、葉には天然の色を帶ぶを見る。

蕾——蕾は瓣形に製したるもの二葉又は三葉を實物の如く鏝にてより、之に蒂をつくれば可愛き蕾が得らるゝなり。

莖——銅線に糊にて青紙を捲きつけたるものなり、これは撫子花のみに限らず、大低の草の莖は斯の如くす。

右の品々出來上らば蘂の銅線につけたるもの五個の瓣をつくる、但し瓣は中程より開き、下は細き壺を爲し蘂は其瓣の折れ開く處まで出だす、又撫子花には蒂の上に袴の如きものあれば、淡緑の寒冷紗に蒂と二種に造れ、袴と蒂の工合は實物を見玉はゞ直ちに明ならん。

次に桔梗の造様は左の如し、

蘂——雌蘂の大なるものならば其内に綿を包みて形を爲し且つ蘂は五本を用ゆと知るべし、カタン糸三四本

を糊にて固め、其先には山吹の心の砕きしものをつけ寄せ、それをまとめて銅線へつくるなり。

瓣――瓣五枚を要す、其下方の瓣の相合ふ所は五瓣各々相連りたるものを裁ち出すかた便利なり、（絞切の法にて半輪へ五個の瓣を切り抜く）其色合は下方は淡黄に淡紫を帯はしめ、瓣頭まで次第〳〵に紫を濃く染むべし、濃紫もて線條をつけ、瓣鬘をあてゝ蘂の周圍をつゝみ合せば則ち桔梗の花となるなり。

莟――半開のものは小形の花を製し、其瓣頭をあつめ、未だ莟の固きものは綿をつゝみ鏝にて角をたて條目を入るゝを忘るべからず。

蔕――葉染のキヤラコにて實物通りに製す、別段六つかしき事業にもあらず。

幹――銅線へ染紙を捲くこと撫子花の莖と大差なし。

此花の纒方は蘂の銅線に花をつけ且つ蔕をつけ、また枝の出づる所には受葉あれば是等にも能々目を止め、實物通りに製し眞に迫るを作の上乗なりとす。

社交一斑

流行の栞

古今帯の結び振り　春夢

當世の帯の結び振り、如何なるものが、高尚なるか、野暮なるか、意氣なるか、澁味あるか、粋なるかを記する前に少しばかり帯の事情につき物語らん。

帯の事情に關し古い事を言へば古事記に伊邪那伎神、御身禊の段に「次於投棄御帯、所成神名道之長乳齒神」とあり、又古歌にも石の帯、かけ帯、常陸帯、花だの帯、賤はた帯などあり、更に角帯は佩の義より出でたるなり、貞丈雑記に言ふ古の女の帯は今の帯の如くはゞ廣きものにあらず、ふくさ帯などいふものなし、皆さげ帯なり、貞衡云さげ帯とは裳袴と云物の帯と同じこしらへ也ひさへまはり也、中に鳥の子の紙を入る、上臈は縫模様金みがきなり、其下はこしあげとて腰な色にかへ、うす紅梅などにそめて前へ下る分金みがき也云々と

嬉遊笑覧云、古の帯はその服の裁餘をもて作れるにや源氏（紅葉賀）おびは中將のなりけり、わが御なほしよりは色ふかしと見給ふ、（典侍のもとより落たる帯を）源氏へ返したるに（頭中將の帯にて源氏のにあらず）花鳥に聴直衣人者は直衣のきれを帯に用ゐたるなりとあり、但し女の帯のさためにはあらず七十一番職人歌合に、帯うり「人妻にかけし衣の細帯のくけ地もあらば嬉しからまし」其頃女の帯も男帯の廣さ

二寸ばかりもあるらむと見ゆるを左右はいづれにても脇のかたにて片鰭に結びさげたり、約文記に「昔は六ッ割の帶を被用候ひつるを、慈照院殿樣の御代より相止られ候、人によらざる義ゥ、女房筆記に古は帶六ッ割にて候し、慈照院殿(東山義政公)御代より八ッ割になされ候、人によるべからず候」とあり、大帶とり組の歌に「京では一條やなぎやの娘、よつわり帶をたすきにかけて云々」とあり、帶地の幅凡全幅二尺五寸を四ッ割として見れば如何に其狹きを見るべし。

落穂集に曰く、就中殊の外樣子かはり候は上下共に女中の帶にて有し、我等若き頃までは莫の巻物を三ッ割にいたし、絹羽二重の類は二ッ割と定りたる如く有し、別而高田樣と申候三ッ割を三分狹にくけ、其端を詰押込みて差置候如く有之候處、四十年許以前より巻物類を二ッわり、絹類は一幅を其まゝに用ゐ、うしろの結び目なども夥しく大に致候」女鏡(慶長板)帶は廣きも狹きも時のはやりに從ふ、廣すぐればしに見ゐて鄙しきものなり、又ちいさすぐれば腰もとあしく、およそ二寸五分なるべし、染やう大ちらしなどは、さしにて宜しからず、これもしんにたてなるをほんとす、のりのこはきは宜しからず、さげ帶などは格別なり、それも柔かなるをすべし」春臺獨語に「婦女の帶は金襴を美麗の限とし、黒地に梅櫻松を處々に織つけて、是を鉢の木帶と名つけて珍重しけり、廣さ纔に鯨尺二寸ばかり、紙を心として綿などいるゝことをなし、四月より八月まで婦女の禮服にて廣さ鯨尺の八歩ばかりを後に結びて垂るゝをつけ帶と云ふ、今のつけ帶は昔の常の帶よりも廣し、今人に昔の事を語れば、虚言と思ひてつゆ信とせず、古きことを知たる人あらば尋問べし云々」昔々物語云「女中の帶皆金織の巾三寸、長七尺五六寸なり、又純子、繻珍の帶もおなじ巾丈なり、中下は木綿金入にて針妙腰元の帶長さは右に同じ、寛文末よりははゞ廣になりて延寶の頃彌廣く、純子三ッ割二ッ割などにて長さ一丈二三尺になりぬ、變なる事共なり、吾妻物語に遊女の風俗を記して曰く、御物すきなるかたびらに色々の御帶の廣さ五六寸あるべきを前にて片手結びになされ云々井原西鶴が一代女(貞享板)當世の風俗、身の程をしらぬそかし、一丈二尺の帶むすぶも氣のつきることぞ、昔は女帶六尺五寸に限りしに、近年長うして物好みよげに成りぬ云々同人の一代男卅三歳の條に曰く、帶は(女帶)紫のつれたりまき、結びめ後にくけめのすみになまりのしづめを入れ云々(これを吉彌結びと稱す)

天和笑委集上野花見の條に品こそなるだて染に、一尺五寸の大振袖、ゆき短く、つま高く、當世やうのみせばに仕立、二ッ三ッ、四ッ重ね着て一ッ前に引合せ小つま揃へて着たるもあり、腰に飾れる丹前帶、うしろへキリゝと引廻はし、吉彌やうに結ぶもあり、前へまはしてかろたむすびにしけるもあり云々

さて吉彌結びとは如何なるものぞ、西鶴大鑑(六)に曰く東洞院の浮世紺屋の娘、すがたのお春といへる名とりあり、上村吉彌(俳優)これをうつして一丈二尺の大はゞ帶、くけめの角になまりのしづけをかけ世に吉彌むすびと、はじめて今にはやらしぬ云々、山東京傳の近世奇跡考に曰く、延寶の頃上村吉彌といふ歌舞伎女形の始じめしのむすびを吉彌むすびとて都鄙なべてはやりぬ云々都風俗鑑に曰く、「帶のむすびは吉彌むすびとて唐犬の耳のたれたるごとく、二ッむすびの兩はしをたらりとさぐるなり、帶屋どもは心得、尺長きをこしらへ吉彌結びはこれこれと直段ひときは高し云々

風流徒然草に曰く「昔は帶のはゞせばく胸高なりし故、尻小さく見ゐ立に結びめもなく、ついはさみたる故取なりも細く、丸く腰の平たきよれ一人もなし、當世は帶も繻子の一幅をふじ三重のあたりまで引下げ、む

すび目は大なるまな板の如し、夫故すそ廣にあづちなどを立てたるやうなりせいひくきよれ(娼婦)は一入取なしあしミ云々、才女秋色が句にむかし婆女さし込帯や雪の峯とありき。

此外諸書を按ずるに昔は帯は質素の制にして幅狹く長さも短かりしも江戸政府の黄金時代即ち元祿の花車風流の時代より俳優、娼婦の社會より次第に幅廣丈長き帯流行し、其結び方もさま〴〵にて、始は前結びなりしが、側結となり、終に後結と變化したるものならん歟。

現今の帯は幅廣く丈長く婦人物は幅九寸丈は一丈を普通としてこれより上り、男子にても幅三寸の博多決して珍らしきにあらず廣幅物は四寸に及ぶものあるにあらずや、以て我國社會の風潮が漸次贅奢に趣くを見るべし。

而して當世帯の結び方は婦人にては妙齢より妻君の年代には「おたいこ」風、これは能く人の知る所なり、八尺の「ひつかけ」は不斷帯なれどこれをだらしなき風に結べば浮氣結びと言はるゝなり、「やの字」とは十二三歳までの少女の背に高く厚板を結ぶものにして古風にして上品なり、これは御殿の女中風なり、元祿頃の吉彌結びに似たる兩端をぶらさげたる所謂「猫ぢやらし」誠にぢやら〳〵したる風俗なれど、坊間能く見受らる「妹背山」のおみわや「松竹梅湯島掛額」のおしちの〆めし帯結びしかたはあれなり。

總ての上品と下品と意氣と野暮とは其帯の仕立色合、模樣によるもの多しと雖も、同じ帯にても其結びかたによりて大層な違あるものぞかし、「譬へばおたいこにても餘り下の方に結べば、意氣には見ゆれども、下品たるを免かれず、上の方へ引上げて結べば野暮なれど上品なり、男帯にても同じ事、ぐつと下ッて尻の處へしむれば意氣とか何とか言はるれど見られた風俗にあらず、之に反してぐつと上げて胸の部へでも結べば甚だ野暮ちきなれども上品を通りこした作なり、上品に過ぐるは厭はざるも下品に趣くなかれ、野暮は上品の意味あり、意氣は下品の意味あり、婦人にて浮氣結びなどや細紐にて間に合はせ、男子にて挿み帯や三尺を前結にするやうなる風を爲すはつまりは自分の損なり、何となれば外より見るときは其風采によりて人物が推定せられ、之が爲め世上の誤解を招くことあればなり。

雜錄

山光水色

《口繪の畫解き》

夏は人をして天然に近かしめ、天然は人をして神に近かしむ。故に夏は一年の日曜日也。神は此の日曜日を以て、人の躰軀を安め、以て其健康を新たならしむるのみならず、人の心魂を洗ひ、以て其思想を新たならしむ。山光水色の人を移すこと豈小少なりと謂んや。卷首掲くるものは、則ち何人も能く之を知る所にして、又何人も能く之を愛する所。曰く繪の島也。曰く晃溪裡見の瀑布也。

家庭雜誌第六拾號附錄
(明治二十八年八月廿五日發兌)

文藝



荒野の泊屋

嵯峨のや主人

臘月の末にもなりぬれば、ならひ風激しく吹て、寒さ最强し、殊に今日は天さへかきくもりて、雪を胚胎風の破障子より吹入る毎に、ぴいといふ音の最冷に聞ゆれば、老人なぞは終日巨燵に當りて、來ん春を今より指折數へて待つ

然れど夏休以來の幾月、故鄕を離て此處なる學校に入り、螢雪の學び怠らざりし身の、

今しも冬休の來りて父母の膝下に走らんとする少年學生に取ては、天摸樣の悪しき何歟あらむ、彼は今日しも彼が其家に歸りたらんには、如何に老たる父親の喜びて彼を迎へ、如何に懐しき母親の笑顔もて其歸りを喜び、如何に愛する小妹が喜びの涙を彼の爲めに濺ぎ、如何に活潑なる二人の小弟が、喜び極まりて聲を上つゝ、走り出て彼を迎へん歟なぞと想へば、瞬時の猶豫も爲難し、彼は朝に學窓を出て、故郷に向て旅立ちぬ

然るに晝少し下りより、雪ちら〳〵と降出しが、四時頃に至りては、滿地の白雪宛然銀を敷たらんが如く、風さへ强う吹出て、果は雪嵐とぞなりける、彼が野原へかゝりし時には、冬の日西に落ちて道も分たず、ゆけどもゆけども野原なり、馴し故郷の村は何處哀れ紛々たる吹雪の音は、恰も虎狼の吼叫ぶが如く、凄じき音して少年の顔や胸を打ち、容捨なく其頭や襟を叩きて、屢彼を恐ろしき雪の臥床に倒さんとぞ荒ける、然して若彼の倒れなんには、雪は容捨なく其屍の上に凄じき氷の塚を築くなるべし

哀れ總身氷の如く冷凍へぬる少年は、今や全く身内の力もよはり果て、膝の折蹶づかんとしゝこと幾度なりしぞや、其感覺の消果んとしゝこと幾度なりしぞや、凍へる足を雪中より拔て、僅に歩を運ばすれども其も歩ばするといへるのみ、何處へ向てゆくかも知らずなりぬ、彼は目も眩み、心も消ゆるに及びて、斯る苦痛をせんよりは、寧ろ一身を天運に任し、雪中に身を投じて、吹雪の中に眠る方ましならめとさへ思ひぬ、然も倘夢

の如き幻想の中にも、若し然なさんには必ず其まゝ倒れ死ぬべしと思ひぬ、此に於て彼は最後の力をふるひ、必死の勢を以て吹雪と戰ひぬ、積れる雪の中より棒の如き足を拔て進みぬれど、其歩は思ふ十分が一も進まざりき、果は全く感覺を失ひて身は天命のまに〱なり、朽たる木の倒るゝ如く、ふり積む雪の中に倒れぬ

哀れ花の蕾の如き少年、疑もなく此野の雪にや埋められけん、若何人歟の強き腕が彼を起し、彼を助けて導きゆかざりしならば、心も消へ、感も失ひぬる少年は、見えざる腕の曳ゆけるまゝ、恰も器械人形の如く進みけるが、やう〱五分計も經けると思ふ頃、燈火の燦然と輝ける最立派なる家の前に來にける、其家よりは洋々たる樂の音、と樂しげなる談話の聲とが洩ける

少年は夢現の間ながら、見えざる恩人の腕、彼を導きて石楷を昇り、此家の戶を開きて彼を温なる美しき一室に突入れしを知りぬ、是實に冥闇を出で光明に入るもの、其變化の餘りに著しかれば、彼は眩暈きて倒れしならむ、若彼を出迎へし人の早くも彼を抱へざりしならば、彼は靜に伏臥にうつされぬ

霎時經てたかれたる火氣の、次第に少年の身を温むれば、快き温きみの全身にや徹しけん、彼は俄然として眼を開きぬ、眼を開けば彼の前には、面影は天の月より淸き、最美しき婦人の立てり、彼女は其白やかなる温き手を以て彼を介抱し、其やさしき天の如き

清き目を以て彼を打守り居たり、彼は一目見て全く其人を愛しぬ。
あゝ氣がお着かへ、お前餘程お疲れだらうねへ、何歟喫たくはない歟へ、私の後へ着て
お出、御馳走するから、
と美人は最打解て言へり、恰も彼の母親なる歟の如く。少年は默して其やさしき言葉に
從ひぬ、彼の心には此語母の言へる如く思はれぬれば。
電燈の輝ける廊下を過て、大なる一室へ入り來れば、花鳥のぬひはくせられたる金襴の
窓掛、紅葉の織出されたる錦の机掛、黃金の燭臺、玉の燈籠なんどの、花々と輝ける美
しさ、目を驚かす斗なるに、室の中央には夥多の男女、今や酒宴の際中なりき、少年は
古き垢附る衣服にて、斯る酒宴の席に來れるを耻ぢ、踵を返して此室を出んとしつゝ、
ふと見れば我身は何時の間にや替られけん、最花やかなる美服を穿てり、其は恐らく彼
が絕氣しける間なりけん
さあ此處へお坐り、是はお前の爲に拵へて置て上たのだから
と美人はいふ。
少年は默して其言葉に從ひ、緞子をもて蓋はれたる椅子にかゝれば、美人は種々の美食
を彼の爲めに運び來る、少年は空腹の時なれば露遠慮せん心もなく、其運び來る食物は
見る見る食盡して殘すことなし、美人は少年の食事せる間、端然として其前に坐りつ、

花の如き微笑を唇頭に漂はして、樂しむが如く其大食を打守り居たるが、其全く滿腹して、箸を置くに及び、莞爾やかに笑ひながら、もつとお前喫たくはないかへ、幾らでもおあがりよ

もう澤山、もう喫られません、此上はもうお禮をいふ計、然し何と云てお禮を言たら宜歟、私は母親の外には此樣な親切に遇た事がないから、實に有難く思ひます、まあ何と云ふて婦人を呼だら宜でせう

何とでも宜が、然し若氣に入ッたら母とでもお言ひな、私もお前を我子と呼から、然しお禮は私に言ふには及ばないよ、今御馳走したのは皆私のものではない、私だとて矢張お前の樣な此家のお客、若有難いと思ふなら、此家の主にお禮をお言ひな、此家の主は情深い方で、お前の樣な不幸の旅人の爲めに、斯して立派な家を作り、斯して温に煖爐を焚き、此樣なおいしい物を拵へてお置なさるのだよ、先にお前が吹雪の爲めに苦しんで居たのを、よく御存で、人をやッて助けさせ、斯して此處へ伴て來させ、私にお前を、自分の子の樣に可愛がッてやれと被仰たのだよ、

おや左樣です歟、其はまあ非常に情ぶかい御方だ、全躰其方は何處に居らッしやいます、え母上、お教え下さい、私は實に有難く思ひますから、是非お目にかゝッてお禮が申したい

左樣歟へ、其はまあ好心掛だ、然し主は誰にも遇なさらないよ、誰も此家の客で、主を見たものは昔からないよ

え、誰も見たものはない？其では如何して私はお禮を申しませう

なあに、其は宜よ、誰も主を見たものはないが、主は誰をも御存で、誰が今如何樣考を以て、如何樣事を思ッて居るといふのも御存だよ、多分もう今お前が有難いと思て居るのも御存だらうよ、然し口で計お禮を言ても不可ません、事實の上でお禮を言はなくては、

左樣、其では如何してお禮をしたら宜らう、私は見る通の貧乏書生で、着て居る衣服さへ私のではない位だから

なに其はかまはない、貧乏は罪ではないもの、其に此家に居る人は、誰だッて主が、全智全能の手で養はれないものはないのだから、此家の物は一ッとして主の物でないものはないのだから、然し如何歟してお前はお禮をしなくてはならないよ、

左樣、では如何してお禮をしたら宜らう、彼は私の命の親だから、私は命でも彼の爲めなら惜まないよ。

左樣歟へ、なに其樣お禮を彼は望はしないよ、彼がお前に望むのは僅だらうよ、其は外でもない、お前は此家の客だから、客相當に身を持て、品格を落さず、誰とでもやさし

く、丁寧に、仲よくして、出來る丈人をいたわッてやる、其丈を彼が望むのさえ、其丈、其は人間の義務で、私も知て居る、が母上、私はもう直此家を出てゆかなければならないのかねへ、其とも未ゆッくりして居て宜のかねへ

言ひつゝ彼は窓より外の方を眺めしが、雪嵐の今も尙暴つゝあるを見て、覺えずゾッと身をふるはしぬ

なあにまだお前、今から其樣事を思ふのは早いよ、其は此家の客は、誰とておそかれ早かれ、此家を出なくてはならないが、然し其は時があるのさ、時が來れば主の僕で、羽のはへた美しい方が迎に來るよ、而して一度此家を出ては、もう歸ッて來るものはないよ、然しまだ其樣事を思ふのは早いよ、まあ一寸此處へ來て御覽、(と彼女は少年を窓の傍に呼び、闇憺たる闇の夜を指して)彼通彼方此方に燈火が見えるだらう、彼燈火は數も限もないが、彼が皆此家の樣な家だよ、誰でも自分の行を正し、品格を落さず、身分相當にして居る、と其人の所へ主の僕が往て、皆此家の一ッへ伴てゆくの、然し誰でも義務を忘れて亂暴をする、と直又其人を追出して、此眞暗の闇に迷はせるの、主は限なく富で居て、限なく強くて、限なく賢明で、限なく仁者だよ、だから子が親を信ずる如くお信じ、左樣すれば、主は決してお前を見捨ないから、お前が何處へゆかうと、始終お前を守て下さるから、

彼女は靜に窓を指して物語りけるが、其窓の外には、恰も天上の星の如く、闇中に千萬の燈火見めけり

少年は母の敎訓身に染て有難く、合掌して主の恩を感謝しける、母は從順なる我子の心嬉しく、其額にきッすして

あゝ左樣してお前主の御恩を感ずるなら、何卒其心を生涯忘れずに居ておくれ、左樣して主を愛し、主の望を望みとし、主の心を心として、總ての人を兄弟の如く愛し、彼等の爲めに出來る丈の力を盡しておくれ。

はい、宜しうございます、母上の御敎訓は決して忘れません、然し如何して母上は其樣な道理を御存になりました

母は莞爾と微笑ながら、

其は此家に昔から一人の御老躰が住で居て、其方が大壯德の高い、慈愛の深い御方だが、私に種々の道理を敎て下さッたよ、今にお前を其御老躰に紹介するから、よく其方の敎を御聞なさい、

と語らふ折しも、此處へ一個の老人入來りぬ、彼は頭に帽を戴き、身に聖意を着け、手に杖を携へたるが、其高やかなる腦額には、如何なる深き智慧をや藏めけん、溫容藹然として慈愛頬よりしたゝり、銀髯光ありて廣き胸に埀たる、一見高德の人たるを知る、

母は老人に向て最慇懃に、

あゝ父上、これはよく御出下さいました、是は私の兒でございますが、何卒私を可愛がッて下された樣に、是をも可愛がッて下さいまし、私に御敎訓下された樣に、是をも御敎訓下さいまし、若又人の道をあやまる樣な事が有ましたら、何卒御見棄なく、御意見をしてやッて下さいましといふ。

老人は莞爾として少年の姿を眺ながら、

あゝ是がお前の子かへ、誠によい兒だ、承知しました、私が承合ふて立派な人にしてあげる、決して心配せぬが宜、お前に似たならば、定めし賢明な兒であらう

と言へば、母は之を聞て大に安心せるものゝ如く、深く其情を感謝しけるが、又少年に打向ふて、

其ではお前、私はもう是でお別れするから、決して御老躰の言葉を御反むきでないよ、私を慕ふ如く、此御老躰を慕ふて其御敎訓に從ひ、行末目出度榮ておくれ、

と言ひしが、其やさしき聲はふるへ、其清き目よりは、ほろ〳〵と涙こぼれぬ、少年は喫驚して、

えゝ何です母上、何處へ御出なさる、其はまあ情ない、何卒私を見捨ないで下さいまし、何卒何時迄も此處に居て下さいまし、母上が此處に居ない時は、私は如何樣に悲しうご

ざいませう

と最周章して述れば

あゝ私も居たい事は山々だが、あれ彼通り、もう迎に來から、迚も此家には居れない

さらばと言へる一言が此世の別、母の姿は見えずなりぬ

嗚呼此時の少年の驚きと悲しみとは如何計なりけん、一樹の蔭、一河の流の縁をさへ、深しといふに、是は又親と呼び子と呼ばるゝは、よく〳〵深き緣ならずや、然るに忽ち其人の見えずなれるとは、少年は淚を拂ッて四方を顧るに、哀れ知れる人幾何歟ある、廣き家の中に在て僅に唯一人の老人のみ、其情深き温容に微笑を浮めつゝ、少年を打見やりて、

さあ我兒よ、往て此家の室々を見やうではない歟、私はお前の母を愛して居た故、又お前をも愛します、此家に有るものは、何なりと私が見せてあげるから、私の後へ跟て來なされ、いくら泣たとて、去た人の歸るべき理がなければ、私の後へ跟てお出、とやさしく言はれて少年は、やう〳〵淚を押止めて、老人の後に從ひ、此家の室々を彼方此方とめぐり步きぬ

此家廣きこと限なし、室の多きことも限なし、然も其裝飾の華麗なる、眩き計の有樣なり、天井は大空の如く丸くして且ッ高く、千萬無數の星の影、風のまに〳〵飛ぶ白雲、

誰が硯せし筆のあやぞや、床の軸には遠山の、影紫にして海蒼く、壁には四季の花紅葉、今を盛と咲亂れ、得ならぬ香室に滿り、誠此家に有るもの、一ッとして主が、全智全能の手にて作られし影ならぬはなけれども、唯怪しむ、家客の如何に不作法なる歟を

只見る一室には無慮二三十人の人、相集りて酒宴せるが、今は早酣と覺しく、杯盤狼藉を極めたり、人は何の用意もなく、衣服はすじれもぢれ、帶は解かゝりてしどけなく、何が面白き歟わい〳〵と囃し騷ぐもあれば、女子を捕へて聞えぬ事共口説もあれば、今にも叩き合はん計に罵るもあれば、又呑拔の男なんどは、此喧囂の中に居ながら、ちろちろ目をすへて騷ぎまはる人達を睨しつゝ、にこにこ笑ひながら、手をのばして德利をひきよするもあり、又此隙に食はざればと思へるが如く、箸を取て盤中の殘物を荒す大食家もありき

少年は一目見て眉を顰めつ、

父よ、是はまあ何といふ狼藉です、高價の酒を無益に溢して、此樣にさわぎまはるとは、主に對しても濟ぬ理では有ませんか歟

老人は點頭て、

實に彼等には困る、主は御心廣いから、酒なぞはお惜みなさらぬ、唯彼等の愚を御哀みになる、人間の義務を忘れて、無益に主の賜物を費やし、獸の如くほへまはるのを見て

は、定めし御心を傷めたまはふ、と愁然としていふ

更に又他の一室を見れば、人は泥醉漢となり果て、流るゝものは酒に非ず、紅の血なり き、或者は主の皿を採て打合ひき、或者は胸盡を捕てこづき合ひき、或者は拳を揮ァ獸の如く食ひ合ひき

更に又他の一室を見れば、此處には瘦さらばひたる半死の老翁、足もふるへ、息も絶々ながら、黄金の皿、銀の盃、玉の箸、水晶の盤、種々の寶を一束にして一隅に坐を占めたり、彼は人の足音の聞ゆる毎に、人影の見ゆる毎に、身を以て其寶を蔽ふは、人の來て其を窃むを恐れてなるべし、玉も黄金も命ありての物にこそ、命の消なんとする際に臨み、彼は何の爲めに其を惜むぞや、人は愚の者にこそ

此他少年は華麗なる彼方此方の室々に、餓つかれぬる襤褸の賤人の徘徊せるを見たり、嫉妬の眼もて榮花に誇る人を眺めつゝ、時に哀なる聲を擧て物を乞へる乞食の一群を見たり、彼は見て驚かざることを得ざりき、驚きて老人に向て問ひぬ、

父よ、何故主は是等の賤人を此家から追出さないのでせう、何故彼等をして室から室を徘徊させて置のでせう

其歟、其は主は極めて仁心なるが故で、若彼等を此家から追出したならば、彼等を戸外に待つものは果して何である歟、恐るべき闇夜、氷の地獄ではない歟、故に主は彼等を

憐み、其改心を待給ふのである、
少年は此時先に遭遇しつる吹雪の苦を想ひ出しつ、あゝ實に彼等は可哀相なものです、私は彼等に主の愛を説、人間の義務を説いて、彼等を救ふてやりませう。
あゝ其は奇特の事である、然し彼等は其を知らぬのではない、知て尚改めぬのである、お前が切角諭してやッても、恐らく彼等は聞ぬであらうよ、然し其は善事である故、先づ試みて見るは宜らう。
此に於て少年は室より室を廻り歩きて、或は乞食の群に入り、或は盲者の中に入り、或は片輪の間に立ち、或は鰥寡孤獨の家を尋ねて、貧しきをめぐみ、爭ふ者をなだめ、傷める者を慰め、驕る者を戒めて、更に大に主の愛を説ける、彼等の中、或者は彼の敎に從ふて其心を改めき、或者は頑固に之を斥けき、或者は之を嘲りき、或者は之を怒り罵りき、此に於て少年大に憤り、之を懲さんとなしける時、老人靜に之をなだめていふ、主は總ての人を憐み、總ての人を愛したまふ、故に我兒も彼等の冷笑と嘲罵とを忍ばざるべからず折しもあれ凄じき音は或室より響きぬ、驚きて顧みる時、一場の修羅場は、開かれて壯嚴美麗の室内に有り、或者は虎の如く嘯たけりて髮と髮とをむしり合へり、或者は狼の如く叫びて喉と喉とを嚙合へり、多くの者は劍を採て相戰へり、或者は既に負傷き、或者は既に死せり、殊に哀なるは一個の婦人なり、數人の兒を抱へて顫へ慄け

り、彼女の衣は裂れて血は所々に點々たり、彼女は幾度歟遁れ出でんとしつれども、數人の荒男、今正に其戸口に鬪へば、逃れ得べくもあらず、劍の電は幾度歟彼女の頭上に閃めけり、彼女は其劍の飛んで我兒を傷けんことを恐れつゝ、高聲に主を呼で救を乞へりき

哀れ此有樣を見たる少年は、一分時の猶豫もなく、猛然として室内に闖入しぬ、暴人の亂拳は雨の如く彼の頭にふりぬ、然れども彼は終に婦人と其兒等とを救ひ得たり、婦人は恐れわなゝける兒等を抱ながら、跪づいて恩を少年に謝すれば、彼の師なる老人は、莞然として、我兒よ、汝はよく汝の責任を盡しぬ、今は靜に安息せよと言ひて微笑り

此時少年はふと痛傷を胸に感じぬ、驚きて見る時、血は瀧の如く其胸より流れたり、彼は刄を以て其胸を刺れしなり、あゝ我は死するなりと思へる時、彼は眩暈きて倒れぬ、此時天の使降りていふ、少年よ、汝は汝の業を終れり、我後へ跟て來れ、主汝を呼びたまふ

此時少年俄に其心の清み爽やぐを覺えつ、覺えず身をふるはしてあッと叫びき、叫べる我聲に驚きて目覺れば、彼の前に立てるは天使にあらで彼の小妹なりき、彼は我家に在て父母弟妹の介抱を受居たるなり

おゝ兄様氣が着たかへ、

是彼が眼を開きしを見て、弟妹が一聲に叫びたるの聲なり、彼の我に返りたるを見て、一家の喜びは如何計なりけん、言ふ丈賤の小手卷たるべし

先に少年が吹雪の爲めに惱める時、同村の農夫某此處を通りかゝりて彼を助け、彼を父母の家へ荷へりしなりとぞ、

少年が夢に見つる壯嚴美麗の家とは何ぞや、其家の主とは誰ぞや、家は我々の住む地球にして、主は萬有の主宰者、唯一の神、我主なることを知るべし

傳へいふ、少年は其一生の間此夢を忘れず、善事を好みて世の人を憐みしとぞ（完）





夏

蘆花生

肥後より豐後へ通ふ旅客は、阿蘇の門なる立野峠の山角を繞ると共に、殷々遠雷の如き響を聞くべし。阿蘇山中に名高き數鹿流が瀧は此なり。此の瀑今は水力電氣利用の計畫ありといふ。

明治廿一年の夏、八月の半なりしと覺ふ、蘆花生所要ありて肥後より豐後に越へぬ。朝とく熊本を立ち、此立野峠にかゝりたる頃は、已に二時に近く、道は阿蘇の腰を遶りて峰頭千秋の煙も吾帽子の簷より立騰る程の高みながら、風ソヨリともせず、蟬聲蟋々と耳を煎りて、日は横さまに髮を炙り、油汗に浴衣もしぼるばかりになりぬ。抑肥後豐後の間は、俚諺にも大坂坂なし坂梨坂ありなど云ひて昔は參勤交代の伴を泣せし惡路なりしを、近年熊本監獄より大勢の四徒を派して道普請をなしてより、今は車馬の往來も自由になりしと聞きつるに、此砂利

路の歩み悪くさよなど喞ちつゝ、滴る汗拭ひもあえず上り行くに、行く手の方に殷々雷の如き音を聞きたり。仰げば初秋の空高く晴れて拳大の雲もなし。鼻歌歌ふて坂路を下り來る馬士に問へば、是れこそ數鹿流が瀧よと云ふ。瀧は近し、道を問ふて國道より右に折れ、水田の畔の細路たら／＼と下り行けば、瀧の音耳近に轟き、真白き瀑の影榎木の間よりホノ見えて、山角崖端十坪ばかりの平地に出でたり。此處に古りたる地藏堂立てり。堂の陰には年の頃五十あまりの百姓、晝あがりの休にや、笠打敷いて、靜かに煙草を燻らし居たり。

地藏堂の側に立てば、瀑壺より吹き來る冷風一陣颯と面を吹いて、一丁あまり彼方に大雪崩の如き一道の瀑布皎として眼を射、轟々鞺鞳の音谷にこもりて足下の地頻りに震ひぬ。此處はいとよき觀瀑臺なり。地藏堂より三四歩、直ちに百尺の絶壁なり。絶壁の縁には宛ながら人を欺き寄せて瀑壺に吸ひ落さむとするかの如く熊笹、觀音笹茂りに茂りて急峻の嶮を隱しおり／＼小手招きする樣にザワ／＼／＼／＼微風に鳴りぬ。地藏堂より五六歩左手に離れて苔青く蒸したる一基の古碑蹌踉として立ち、其側に榎の大木真黑に繁りて、猿猴の手の如く長き一枝は飛び上りて捉ふ可き程に低く熊笹觀音笹の上を這ひて、末は遙かに瀑壺の上にさし出でたり。

瀑壺は直徑六七十間もある可き大圓筒なり。苔青き絶壁水際より削り立てたる樣に百尺あまり聳へつゝ、ぐるりと瀑壺の水を取まき、纔かに下の一角を開いて黑川の流を漏らす。老樹、

小樹、眞黒き葉、眞青き葉、深樹、修竹の類鬱々く其頂を縁とりて、其上には山又山青屛風の如く取圍み、青空は盆の如く上に蓋す。凄まじき水の勢や。矢の如く駛り來りし黒川の流は、兩岸よりさし蹙る岩角に束ねられて、捩りたる樣に折れつゝ三十三丈の絶壁を飛び下る勢、宛ながら萬斛の白雪萬斛の白綿花を捲き落し渦まき落すが如く、一心に眺め入れば瀧落ち水動く樣にもあらで、瀑は永遠、白く一所に挂かり、また忽ち轟々の響に驚く。凄じき水勢や。一川の水怒つて下り撃てば、深き瀑壺は窅然たる巨口を開いて之を吸ふ音轟々として山鳴り谷響き、瀑下の水は瀑に撃たれて落ち凹みつゝ水中に空井を作り、また眞白く煮へ返り、沸き上り、大波立ち、小波舞ひ、瀾は波を押し、波は漣を押して、藍の如き水ピタリ〳〵絶壁の根を拍てり。遠ふして眺むれば、瀑のあたりは飛沫一面に狹霧となつており〳〵瀑を立ち隱し、絶壁の寄生木は眞青き枝を半空にさしのばしつゝ、鳥の如く羽ばたきぬ。跪いて絶壁の下を覗へば、屛風の如き絶壁に包まれたる深潭幽然として黛の如く青く、底は知らねど水の面は瀑布下撃の勢に驚きて潭上の山影樹影碎けて千萬の片となりぬ。碧潭の水、知らず深さ幾尺ぞ。其深き底には、知らず何ものかある。差し出でたる榎の枝にすがりて俯して覗はむとすれば、瀑の音俄かに高ふなりて、氷の如き風は冷やりと面を吹きぬ。

暫し此凉しき風を入れ行かむと、榎木の陰の石を拂ふて腰打かくれば、先程より地藏堂の陰に踞して話相手欲しげに此方を眺め居りし百姓、彼方より聲をかけ、彼一句、吾一句、二言三言

問答に、何時となく話の糸は長々と曳き出されぬ。田舍者の氣長くも悠々と煙草輪に吹きつゝ、此瀑の高さ、深さ、由來、靈驗より說き出でゝ、近年此瀑に不思議の事あり、小雨そぼ降る闇夜には瀑壺より眞青き二つの鬼火ふら〳〵と浮み出でゝ此榎の梢にかゝり、瀑の音の間々におり〳〵悲鳴の聲聞ふるといふ事まで眞顏になりて語り出づるに、左樣か、其樣な話はよく田舍にあるやつ、と含笑ながら頷く吾顏つく〳〵見て、譯を御存なき故噓と思はつしやるも尤ながら此には不思議な話がムりますと云ふ。其不思議な話と云ふは、と問へば、百姓は吹殼地藏堂の石段に礑とたゝきて、悠々と木の煙草入より是れはと云ふ程手作の煙草を撮み出し、大きな煙管に押つめながら、吹殼を左の掌にのせて、煙草吹ひつけ、吹殼投すて、パク〳〵二三服長閑に吸ひて、阿蘇の煙ほどなる兩條の煙の鼻孔より出でゝ榎木の梢にのぼり行くを見送りながら、其不思議な話と云ふは

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

五年前の春暮の事なり。豐後街道普請の時、熊本監獄より大勢の囚徒派遣せられて、立野峠なる立野村に屯せり。(御覽なされ、アノ染めた樣な青ひ松林の間からチラ〳〵茅屋根の見へる村が其れでムります)。監督の役なる看守長は、六十近き老人なり。犬と猫とは同じ皿に飯食ふとも看守と囚徒は同じ家には住み難しと云ふに、不思議にも此老看守、囚徒の人望を得て、皆よく其命に從ひぬ。(其にはいろ〳〵譯があつたそうでムいますが、あまり話が長ふなります

れば』然るに其年七月の初に到り、熊本より新しき看守長また多く囚徒を連れ來りて、老看守長に代りぬ。此看守長年の頃四十に近く、デップリ肥へて、丈低けれど骨逞ましく、眉黒く、眼大きく、唇厚く、頤に牛の尾の如き赭黄の髭ありて、鼻赤く常に鼻頭に汗かく癖あり。左の眼の下の痣と右の額に斜に膨れたる疵とは殊に眼立ちて、頸は牛の樣に頭より直に胴につゞき、常に劒の中程を左の手に握りて、右の手を腰につけドッシリ／＼歩む癖あり。物を見る眼ざしに恐ろしき光ありて、眞黒き眉ともすれば一文字に寄り、赤き鼻よりは滴る樣に汗かきける。

此看守長の來りし夜、囚徒は竊かに語りぬ『ドウヂャ、今度のは』『アノ赤い鼻がドウヤラ氣にさはる』

果せる哉、新看守長は、翌朝囚徒の群を閱するに臨み、一人の囚徒『禮』の頭のや、高かりしかばツカ／＼歩み寄り、物をも言はず、力任せに囚徒の項を押し下げゝる。是れ手始なりき。看守長は夏の來るが如く、ヂリ／＼熱くなりぬ。一昨日は睨まれたる者あり。昨日は叱られたる者あり。今日は減食せられたる者あり。看守長が日々囚徒の群を見まはる眼は、只管祟る可き穴を搜すが如く、囚徒は陽に恐れて陰に彼を咀へば、看守長は之を知りつゝいよ／＼復讎の如くに彼等につらくあたりぬ。朝涼の嬉しき程、午熱はつらし。前の看守長去つて、囚徒はいよ／＼炎熱の酷しきに苦しみける。

夏は日に／＼熱くなりぬ。浴衣一枚帽子被りて傘さしてすら夏の旅は堪へ難きに、竹の子笠

一つ打破りて重き鐵鎖を二人が間に曳きつゝ、輪轉機を曳き、石を割り、土を舁き、砂利を荷ひ、崖を剔れば、土用の日は鬢より背より照りつけ、見るからあつき赤土、銹びし樣なる黄き石は十分に熱を吸ふて大蛇の息の如くホヤリ／＼熱氣を吐きかけ、身は上下より炙られて、顔はほてり、眞黒き煤の如き汗額より兩鬢よりタラ／＼流れ頸筋より胸毛に滴り蟬の音は、ヂリヂリ耳を煎り、石片砂粉のキラ／＼光るさへ見る眼も黒ふなるばかりの暑さを忍ぶ身は、つらしと云ふも中々なり。或日一片の白雲遙かに頭上の青空を飛んで地上は蟬も鳴かぬ程あつき午後の日ざかりに、囚徒は申し合せて五六人打連れ、松の木蔭青々として崖より水しやら／＼と落つるあたり板葺の假休息所に椅子にもたれて涼み居る看守長の前に行きて、腰を屈めたり。『何ぢや』。『少し御願がムります』。『何ぢや』『あまり暑ふムりますで、ドゥか少ゥしばかり……』。『イヤ、ならぬ』『ドゥゾ、少ゥしの間』『イヤならん、此方がちやんとこうして居るではないか』『でムりますが、ドゥゾ御慈悲に。先の看守長樣も日ざかりには休まして下さいましたから』。見る／＼看守長の眉は一文字に盛り、大粒の汗赤き鼻頭に湧き出で、眼は恐ろしく光れり。『何を云ふ、ならんと云つたら相成らんぞ』。頓てにやり／＼笑ひ『フ、ン。前の看守長がドゥしやうと、此方が知らぬ事ぢや。コラ、サッ／＼と仕事にかゝらんか』。囚徒の中に年の頃三十ばかりの氣ばやき寅次といふ男、たまり兼ねて進み出で、『貴方樣、申し兼ねますが、此暑さでムりますから、ドゥゾ』。言終らざるに、看守長が右の拳は寅次が面門に閃きぬ。寅

次は左の腕をあげて遮りぬ。看守長は手向ふとでも思ひしか、後ろざまに椅子を蹴倒し、立ちざまに右脚を飛ばして寅次を蹴すへぬ。あとは一場の立まはり。寅次が同じ鎖の友の辰五郎が看守長を抱きとめたる瞬間は、寅次が二度三度したゝかに看守長の靴に蹴られたる後にして、他の囚徒等が無念の齒を嚙む寅次を押へて無理に地上に跪かしたるは、看守長が足をおさめて生きたる石の如く突立つたる瞬間なりき。囚徒一同さま〳〵に陳謝しければ、寅次はやうやう減食一ヶ月、其他云々云々の罰に處せられ、他の囚徒一同は程なく見まはる看守長の大の眼玉を戴きぬ。寅次は其日仕事しつゝも、蹴られたる腰の骨をり〳〵撫でゝ、辰五郎が物言ひかくるも返事だにせず、ボンヤリ思案に暮れて居たりける。

其夜立野村の假監獄にては、看守の見まはりしあとにて、竊々聲に左の會話行はれぬ。

『源、寐たか』。

『イヽヤ』。

『ドウシヤ今日は?。あんまりだのウ』。

『ソウよ。アヽ、ぢやあ、今に己等も撲き殺されるかも知れんぜ』。

『ソウとも。今日は己れもあんまり齒がゆうて、撲殺してやつたかつたぞ』。

『でも生命はやつぱり惜しいからのウ』。

『生命も糞も入つたもんか。己が寅次なら、撲殺してやる』。

二三間離れて寢て未だ眠り得ざりし寅次は、眠入れる風して竊かに聞き居たり。

新看守の熊本より連れ來りし囚徒の一人の聲として。

『貴樣達あまだ知るめへが、今日の位は、茶の子だぜ』。

『フーン、何樣な事があつたのか』。

『何樣な事つて、マァ聞いて呉れ。アの赤鼻あ奴、人を殺めやがつたのサ』。

忽ち輒々靴の音聞へて、話聲はコッキリ止まりぬ。提ランプの光パッと暗中に流れ込み、眞黒き人影ヌッと窓より半身をさし入れ、『コラ／＼、靜にせぬとならんぞ』。答ふる者なし。靴の音は輒々遠かりて、光は螢の如く細ふなり行く。

『人を殺めた？、其アマァ一躰ドウしたんだ？』

『マァ聞いて呉れ。己等が熊本に居た時分(其あ前月の事よ)ソラ、アの石龜山に大勢石切りに行ッたんだ。スルとやつぱりアノ赤鼻奴がついて來やかつて、始終アノ御眼玉で睨らまれたのはよかつたが、歸りには一尺角の石四ッつゝ二人で荷ふと云ふ理屈サ。己等あ是でも四斗俵引負ふて垣を越へた男だからソウも無かつたが、可愛想なは六十四五の老爺よ。ナンでも賭博で二三ケ月前に入獄つたんだソウだが、ソリヤ、モウ藜の杖ついて御寺參りした方がよッぽど似合つたおとなしい老爺よ。ソノ老爺が己等の二三間前にサ、十何貫の石の後棒かついで、二足行つてはよろ／＼、三足いつてはよろ／＼、息せきかついで行く後姿を見た時にやあ

内の老爺を思ひ出して〻有躰の事、己等あ涙が出たよ。ソレにまあ聞いて呉れ、赤鼻の鬼め、其老爺の側に來やあがつて、『コラ、急がんか、愚圖〱すると聞かんぞ』と云ふぢやねへか。誰が十何貫の石ィ舁いで、ソゥ急がれるものか、のゥ源。スルと老爺やあ居所の歩で、またヨロ〱ヨロ〱二足三足行くと、モゥ息がきれて歩かれないで、其處へ立つて腰を伸して居ると、あの鬼奴が後から拳でもつて背をドシ〱突いて『コラ急がんか、急がんか』と押つ立てやがるヂヤねへか。老爺はまたヨロ〱ヨロ〱〻ころげそうに歩み出しちやあ堪へ切れないで直ぐとまる。今度ァ鬼奴、獄衣の外から見へ透いて居る老爺の背骨を、劍の鐺でウンと云ふ程敲きやあがつたらう。老爺あベッタリ尻餅ついて、馬鹿の様になつて居たが、やがて鬼奴が顔あヲイッと見てポロ〱涙こぼして、手を合はせ居つた。己等ァモゥ其時にやあ鬼奴が悪いよりあ老爺が可愛想で、ドゥかしてやりたかつたぞ。ソレに鬼奴、また劍の鞘で老爺が肩骨ドシドシくらはして追つ立つる老爺ァ止まると打たれる、歩むと腰骨も肩骨もメリ〱云ふ、行くにや行かれず、止まるにやあ止まれず、後から打たれたり突かれたりヨロ〱ヨロ〱倒る〻様にして二三間歩むと、ソラあの田ばたの古井のある處へ來たんだ。來ると老爺は舁いだ棒を外づすが早いか、アッと云ふ間に古井に飛び込んだのよ』。

二三間離れて寅次と並び臥したる辰五郎は、先刻より耳ひつたて〻聞き居りしが俄かにガクと刎ね起きて闇中に坐しぬ。

『ソシて其老爺あドゥなつた』
『ソレから井戸へ下りたり引きあげたり大騒したが、モウだめよ。老爺あ頭あぶち破つて、血だらけになつて死ぢまつた』
『其老爺あ……名は……何……と……』
『誰だい。辰か。何故其樣な妙な聲出すんだ』
『其老爺あたしか辰造とか云つたつけ』
『エ、……』話は暫し絕へて、手負いし狼の呻くが如き音のみぞ闇中に聞えける
『フン。其れぢやあ、赤鼻奴か殺めたのも同然ぢや。其に何で便々と今に看守長ひけらかすのだろう？』
『所が世の中あ兎角依怙の沙汰で、アノ赤鼻奴、知事とか典獄とかの遠姻ぢやそうな。それで大分事が矢釜しうなつたれど、何やう角やらで誤魔訛しやがつて評判のなくなる間此處へやつたんだそうだ』
『フーン、ひどい話ぢや。そして其老爺にやあ、裁判にでも訟へる樣な緣家親類はないのか』
『たしか息子があつたつけが、其奴も賭博で早から入獄つて居たとか。檻が違つて知らぬのぢやらふ。ソレに十九か二十位の別品の娘があつたが、ソラモウ不思議に評判の孝行女で、老爺が監獄に居た時分にやあ、毎日の樣に差入物だのなんだの持つて來居つたが、老爺がなくな

つてから彼方走りし此方走りして敵をとつて呉れと泣いても、誰も知らぬ者の事にとり合ふ者もない。ソレでトゥ〱氣が狂つて、今に敵取つて呉れ、敵取つて呉れと泣いて居るさうぢや』。

『エッ……』。

『コラ、まだ寢んか』。突然にランプの光さして、押丁戸口に立てり。『ヘイ〱、只今』。あとはひツそとして、頓て何れも鼾の聲雷の如く響きける――、唯二人の外は。

翌日午食あがりの小憩に、一人の囚徒水汲まんとて、山角に小舍の如く蟠る岩の端を廻りしに、ハッと驚きて岩の陰より立ち上る兩人は辰五郎と寅次なりき。屹と注ぎたる二人の眼ざし、流石の囚徒も眼をそらしぬ。

夏は日に〱熱くなりぬ。看守長の壓制もます〱加はりぬ。辰五郎と寅次は驚く、可き勤勉者、驚く可き悧巧者、驚く可き追從者となれり。二人は終日働きても不平を云はず、看守長の來る時は平身低頭して、爭ふて其鼻息を覗ふことを務めぬ。斯くて二人は同輩の嘲笑嫉忌を受くるまでに何時しか看守長の氣に入れり。

三週ばかり過ぎぬ。八月の初の或日、山にも谷にも凪といふ凪ソヨリともせぬ暑さに堪え兼ねて、看守長は辰五郎寅次及他の二人を引連れ、午後の小憩に數鹿流が瀧に行きぬ。地藏堂の傍に行けば、瀑より吹き來る風冷やり〱面を吹き、頭上の榎に雨の如く蟬鳴きぬ。看守長は

忘れたるものこそ。あれど、他の二人に假休息場より一瓶の酒を持て來れと命じければ、二人は去りて辰五郎と寅次と看守長と唯三人瀑布の前に殘りぬ。看守長は左手に劍のたゝ中を握りて右手を腰にあて、地藏堂より二三歩、絶壁の端に近く立ちて何心なく瀑の風に當り、辰五郎は右に寅次は左に看守長より二三歩下りて鏈を垂れつゝ蹲踞し居る。忽ち風一陣吹いて、瀑の音雷の如く鳴りぬ。二人はヂッと顔見合はせて、鏈を手に持ちつゝ悄々地に立ち上りぬ。彼此相距る唯三歩。兩個の囚徒は牛の如き看守長の頸を一心に見つめ、呼吸をはかつて暫したためらふ。忽ち看守長は何感じけるにやゾッと身震ひしてふりかへる此一瞬、兩個の囚徒は走りかゝつて、看守長を鐵鎖に引つゝみ、兩方より無手と腕をつかんで『來い』と哮りつゝ我身諸共絶壁に引ずり行かんとすれば、看守長は眞青になりて地藏堂の方に行かむと身をもがく。囚徒は齒嚙して猶も『來い、來い』と唸りつゝ、掙扎きあがく看守長を曳ずり〳〵、六個の足は已に絶壁の緣の熊笹に踏みかゝりぬ。ザワ〳〵ザワ〳〵ザワ〳〵、熊笹觀音篠は縱横に踏みにぢられて、今一足、三人が身はまさに百仭の瀑壺に落ちんとする時、すばやき看守長は飛び上りて猿猴の手の如く差出でたる榎木の枝に吊りぬ。飛び上つて榎木の枝を捉へたるはづみに、看守長の胴を纏ひたる鐵鎖はガラリと脫け落ちて、笹のザラ〳〵鳴りたるも唯だ一瞬、『殘念』の一聲帛を裂く樣に瀑布怒號の中に響きて、兩囚徒の影は絶壁の下に消へける。酒を荷ふて他の兩囚徒が來りし時は、辰五郎寅次は影もなく、看守長唯一人、常にはあらぬ眞

青き顏して、赤き鼻頭に大粒の汗を流し、惘然として地藏堂の陰に立ち居たり。明る日此瀑より二里の下流なる瀬田と云ふ所に、骨も肉もさゝらの如く碎けたる生々しき足一本手一本、血に染みて柵に流れかゝりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

や、長物語で日が暮れかゝつた、ソレナラ御先に、と百姓は煙管ポント收めて敷いたる笠の土打拂ふて頭に戴き、鍬肩上げてのこ／＼榎の木の蔭に隱れ去りぬ。吾は猶暫し地藏堂の側に立ちて瀑に向ふ。話に時移りぬらむ、夕日の影高く前なる山を上りぬ。冷やり／＼瀑壺より吹き來る風身にしみて、鞺々たる瀑の音の間に、蜩の聲鈴をふる樣に聞へける。



凾嶺所見　愛山生



(一)

幾百年若しくは幾千年前に、大木を以て蔽はれし深山を綴ひて徐かに流れし、細流あり。一雨降る毎に地層の幾分を洗ひ去りて、漸く一條の谿路を作り、更に幾百年を歴て兩岸の土を剝ぎ此處に一個の深谷を生ぜり。

見上れば幾重の山の頂には、雲の去來を見ると、朝に夕に絕へず。而して雲影の益密集する後には必らず谿流の激駛するを見る。飛瀑之に懸り。奔流之れに鳴り。綠樹之に臨み。長橋之に架す。

此谷は即ち蛇骨川、此橋は即ち萬年橋。予は其左岸なる温泉宿、魁春樓に投じて三週日を消せり。

（二）

魁春樓の屋後に温泉出づ萬壽湯と云ふ、筧を以て之を通じ、谿流を和して其温度を低くし浴桶に注ぐ。水性澄明にして底を徹す。別に人造の温瀑布あり。日夜響を絶たず。

讀書して倦めば之に浴し。碁を圍んで倦めば之に浴し。談論して倦めば之に浴し。晝寢して覺れば之に浴す。又或は深夜獨り眠らず無聊に堪へずして之に浴する者あり。

雪の如き膚、墨の如き膚、赤き者、鳶色の者、肥へたる者、瘦せたる者、長き者、短き者、喋舌なる者、呻吟する者、沈默なる者、睥睨する者、頑是なき小兒、皆來りて之に浴す。

浴場は浴客の倶樂部なり。彼是の思想の交換せらるゝ所也。

（三）

函山は余が懷古の詩題なり。

戊辰の革命に因つて江戸は西南の健兒に渡されたり。此年より翌年にかけて。羊腸を攀ぢて東より西に去る者あり。日又日。月又月。蟻の行くが如くにして絶へず。是れ江戸の舊主人たる三河武士が敗軍の恥辱を蒙りて竄流の地に徙り行く者なり。

知らんぬ、此時幾たびか岩角に起ちて東の雲を眺め、命の既に窮せるを歎じたる、幾多の血性男兒ありしを。而して今や彼等の多くは東西南北の土となりぬ。彼等の殘れる者の髮は既に霜の浸す所となりぬ。唯時めく者は江戸の新主人たる伊藤、西郷諸人のみ。

余は當時未だ東西を辨ぜざる稚兒として、叔母と共に駕籠に釣られ、流竄者の一人たる運命を自覺せずして此山を過ぎたり。余は當時の事に就て何をも記臆せず。唯板砂糖を嘗めつゝ旅中を過ごせしことゝ、此山の麓にて梢を雲に包まれたる杉を見しことゝ、輿丁の磴々たる石階を杖つきつゝ行きしことゝ、其裸躰なる背形(うしろつき)のいかにも見苦しかりしことゝを彷彿として記するのみ。

後に至りて我祖父が記したる當時の日記を閲すれば、我れ此時祖父に抱かれて懸崖に臨みしに、忽ちにして脚下の土崩れ殆んど生命を危ふせしことありしと曰ふ。然らば即ち函山は我生命也。

祖父の日記、又一句を記るして曰く、

これよりは孫をたよりに富士の裾

當時家慈は既に逝き、家嚴は家を脱して函館、五稜郭に戰へり。固より生還を期せず。祖父の煩む所たゞ余ありしのみ。想ふにあしの湖に芙蓉の影の倒なりし時、祖父が余を撫して感ぜし所、蓋し眞に斯の如きものありしなるべし

明治廿二年余志を立てゝ東遊す。是れ余が函嶺を超ゆるの第二回也。戊辰の翌年余が此山を超へしとき我家人の數は實に六、而して其の三は敢果なくも片土の土となりぬ。「孫をたよりに」と詠じたる最愛の人も亦た一個の青塚となりぬ。余は俯仰して感慨に堪へざるものあり

き。流竄の境遇に在りしが爲めに、幼にして家の主人となりしが爲めに、余の遊學は實に晩かりき。而も期する所は父祖の名を墜さゞるに在るのみ。遇ま清泉の觸れて益激するを見て詠じて曰ひき。

幾たびかせかれてなほもほとばしる
岩ほは水のちからなりけり

余は流竄者の運命を余に與へたる諸君に向つて余を激したるを感謝し得るの時あれかしと願ふ者なり。

余は函山に對して多くの聯想を有す。魁春樓上、夜闌にして燈闇き時、余が懷に往來するものは是れ

(四)

人を知るは溫泉の客舍に於てするより善きはなし。

魁春樓は平民的の浴室也。此に集る者は所謂中流の人也。

Aなる一個の青年あり。彼れは日本人の中に於て稀に見る所の長身なり。余は始め彼れの髯を蓄ふるを見て、是れ一箇の官吏なるべしと猜したりき。而して彼れが善く英語を繰るを見て、更に彼れは久しく海外に在りし外交官なるべしと猜したりき。されども余は容易に彼れと一語を交ることをせざりき。何となればかゝる人に物を言ひかけて菅なき挨拶を辱ふした

るは余が多年の經驗にして侮辱せられたりと感ぜんよりは寧ろ默して無關係を保つこそ余に取つて幸福なるべしと思へばなり

然るに余は偶然にも彼れと余とは全くの無關係なる能はざるを發見したり。一日余が知れる一個の組合派の敎師が蘆の湯に行くに遇へり。而して此敎師が駕籠にてAを訪へるに因りて余は此敎師を通じてAを知れり。一個の友を有する者は多くの友を有する者なり。何となれば友人の友は即ち我友なればなり。余はいつとなくAと往來するに至れり。

彼れは象の此く大にして象の如く柔かなり。彼れの言語は明逝にして彼れの音聲は靜かなり。余は無邪氣にして飾らず、一毫も人を凌ぐの氣象なき彼れを愛せざる能はず。彼れは三年を米國に過ごし、四年を獨逸に過ごせり。彼れは新歸朝の一人なるが故に未だ全く故國に慣るゝ能はず。彼れが始めて此家に投ぜし夜、車夫が彼れを誤認して外人となせしは、獨り彼れが長身なるのみならず、獨り彼れが多量の煙草を喫するのみならず。其風姿の猶外國人に似たるもの多かりしが爲めなり。

余はAを通じて更にBなる青年を知れり。彼れはAより遲く來り、Aより早く去れり。彼れは久しく米國に在りて神學を修め、兼ねて獨逸語を修めたりと稱す。彼れも亦洋行したる青年に特殊なる品性を有す。彼れの髮の何時も整頓したる、彼れの多量の煙草を喫する、彼れの物柔かなる、彼れの眼鏡越しに人を眺むるの風は余をして此種の人を誤認せざらしむ。

余はAの如くBを愛する能はざりき。Bは余等に向つて己れを尊敬せしむべく要求するが如き態度を爲せり。余は寧ろAの率直にして而も何人にも敬意を失はざるを愛す。余は態度に因つて直ちに其人と爲りを論ずるの頗る偏癖なるを知る。而も人の本能は他人の態度を通じて表はるゝ精神を看取す。三才兒も亦愛すべき人と愛すべからざる人とを區別し得るなり。

余はAが試を歴て官吏たらんとするの志あるを知りしが故に彼れに曰ひき、人間の功名必しも官吏たるに限らず。君何ぞ運命を民間に造るの計を爲さゞる。彼れは歎息して答へき。余も亦今日の官吏が藩閥の陋習あるを知らざるに非ず。而も一たび吏たるに非んば、民間に立ちて事を做すも亦難し。一たび官吏となるは民間に事を爲すの格段なりと。彼れは余よりも賢しこかりき。彼れは其父の官吏たるが故に官吏たるの利益を解せり。大坂は平民的の大都會なり。而も各會社の頭取支配人其他の重役たる者を見よ、多くは一たび官吏たりし履歴を有するに非ずや。

余はABの口より現政府を罵るの慷慨談を聽くを得ざりしを怪しまず。

余は又Cなる一個の人物を知れり。

彼れは殆んど總身に刺繡したる白皙の美男子なり。彼れにして若し恐ろしき文身だになくば、余は彼れを形容して、容貌婦人の如しと曰ふべかりしなり。彼は低き音聲にて口重く語り、

時として其凉しき眼睛を轉して人を見る。彼れは魁春樓中に於て余が見たる最も美しき男子なり。

始め余は彼れが泌水に對する一室に座して獨り靜かに杯を把りつゝあるを見たり。而も彼れと語を交ふるの機會を有せざりき。既にして彼れが將碁を善くするを聞きしかば、余は強て一戰を彼れに挑み見事に敗北し、之より彼れと往來せり。

余は彼れの多藝なるに驚かざるを得ず。彼等は葉唄を歌ひ、獨々逸を歌ひ、常盤津を解し義太夫を解し、圍碁を解し、諸種の博奕を解せり。

彼れの職業は我黨の疑問なりき。或る者は彼れを以て「若旦那」にして洒落に文身したる者なりと曰ひ、或る者は彼れを以て賭博者なりと曰ひ、或る者は彼れを以て髮結所の亭主なりと曰ひ、或る者は顰蹙して彼れを睥睨せり。彼れは鄙事に多能なれども、而も品格を墜す程に卑しからず。唯時々「こうしやァがッタ」「あゝしやァがッタ」等の俚語を用ふるとあるのみ。

Dは田舎銀行の支配人にして、年齢七十に近く、將碁、骨牌、圍碁等の勝負事を好み、勝つ時は極めて喜び、負くる時は沮喪の色著しく酒量少き老人なり。彼れは色淺黒ろけれども、極めて可憐なる青年の女子を伴へり。彼等は父子なりき。

余は猶各種の人を知れり。

或る者は華族にして多辯なり。而も其語る所は主として金殖けの談話なり。

D曰く彼れの慾の深きは測り難し、F曰く彼れは狂人なり。

或る者は横濱の商人にして善く語る。彼れは樓上に來り宿せる風姿婀娜たる一妓に誘はれ、始めは知人の如く語り、中ごろは夫妻の如く語り、終に相携へて何處にか去れり。慧眼なるC曰く彼れは何處へかくは行かれたり。

Hは嬌態滴るゝばかりの女性なり。彼女は單身にして來り。余等の隣室に宿せり。彼女は日に幾度びか化粧を爲し、日に幾たびか何處へか去れり。彼女は初見の男兒に物を言ひかけられて少しも羞ぢず、却つて眸子を轉じて他を視る。余はCの如く慧眼ならざるも猶彼女が尋常の女子ならざるを知れり。

人間を研究せんとせば、温泉に行け、余は此處に諸種の人物を知り得たること、獨りABCDEHに止らざるなり。

（五）

函山の自然は先人の題詩多し。之に註するに數言を以てすれば以て函山の勝況を槪すべし。

其溪流を語るや。或る者は「あゆはしる早川波」と歌ひ、或る者は「泉聲夢裏聽」と歌ひ或る者は「瀧の白糸」と歌ひ、或る者は其一派消へんとして一派生ずるを歌ひ、或る者は其雨聲と誤り易きを歌ひ、或る者は其さゝやくが如く私語するが如きを歌へり。

余嘗て三島驛に泊す。夜來雨聲の窓を打つに驚かされて起ては月影霜の如く、碧空拭ふが如

し、此時初めて溪聲の雨聲に似たるを知りき。函山雲多し、而して水聲枕に響く、是れ雨か、是れ水か、殆んど其區別を知るに苦しむとなきに非ず。

其雲霧の變化を語るや、或る者は其須臾にして風起り、前山一帶の雲を爲すを歌ひ、或る者は歸路を白雲に遮らるゝを歌ひ、或る者は其凉氣の骨に透るを歌ひ、或る者は「時雨は袖のしたよりぞふる」と歌ひ、或る者は「雲橫下界茫如水、羣嶺都爲湖上山」と歌へり。

一日蘆の湯より元箱根に向つて山間を歩し、山の一角少かに缺けて湖水の碧なるを眺むべきの處に立つ。たま〳〵霧起りて天地一白、身は雲に包まれて仙鄉に飛ぶに似たり。淵明が所謂「雲無心にして岫を出づる」の詩趣は唯此山中に在るものにして始めて會すべし。

其山高く月小なるを語るや、或る者は「やまの峽よりさしのぼる月」と詠じ、或る者は「山吐月半璧」と歌ひ、或る者は夏月の凉しくて秋月の如くなるを歌ひ、或る者は「一峰吐月一峰雲」と歌へり。

此月某の夕、余は一童子を携へて萬年橋を歩し駒嶽に上れる月を見たり。山は黒き大輪郭を爲し月は寂し氣に雲を穿ちつゝ行く、橋下の水聲鞺々として凉言ふべからず即ち二句を朗吟して曰く月明函嶺水聲多、敎人坐思吹笙人。蓋し新羅三郎に聯想せるなり。



想出るまゝ

國木田哲夫



五個月の間、艦隊に從軍中、見聞の事まことに多き其の中に、必ずしも新聞紙に報道する程の目ざましき事のみに非ずして、つまらなき事の中、却て面白味ある話も多かり。いま想ひ出すまゝに其一二を書き並べ見んと欲す。

(一)誕生日

今日は某少尉の誕生日なれば、來れとのボーイの傳言ありければ、何事のあるやと士官次室に至り見るに。時は十二時に近かければ、已に午食に間もあらず、卓子の上には樣々の馳走山をなし。ほや〳〵と煙たつは長崎より新たに屆ひたるコック御自慢の菓子なり。其菓子の名は知らねども、煙たつ有樣、卵色の材料に濃き牛乳のどろ〳〵したるを流しかけたる、一目に喉の鳴る心地す。其の外の馳走は一々あげがたし、蜜柑もあり、パインアップルの罐詰もあり。」さて坐定まるや、先づ食卓長の士官起立して杯を擧ぐ、之れにならひて他の人々皆な杯を擧

ぐ、食卓長ゑみを含みて、

『今日は某士官の誕生日で御座ります、由て聊か祝意を表するため此宴を開きました。御見かけの通り何の御馳走も有りませんが(ノー〻〻)、御遠慮なく十分平らげて戴きたう御座います』。

と更らに一段聲をあげ杯を高くさゝげ、

『某少尉の武運長久を祈る!』

一同之れに和して聲高く、

『某少尉萬歳!』

其のあとは所謂御遠慮なく平らぐる一段にて別に珍らしき事なけれど、鮪の刺身の木片の如く氷りたる、大根おろしの水分の雪となりて口に入るればざく〳〵する、皆おかし。大鯛の丸煮は食卓長萬歳と叫ばしめたり。煙たつ菓子も忽ち盡くれば、あとは雜談半日、艦内歴日なし。

(二)死の蔭

或夜ことの外さむく、風さへ起りて何となく物淋びしければ士官室の諸士みな早やく私室に退き、常には似ず其夜は、十時ごろ已に人氣なく、余ひとり倚子に身を投げて、煖爐の前に茫然と坐し、色々のことと思ひ續けて夜のさらに更くるをも知らず。

ふと心づき衣兜より一通の書狀とり出して、讀みて次の句に至る、

『僕已に斯病に罹り斯境に處る齷齪以て思ふも何の益かあらん滔々たる世事僕に於て固と顧みざる處今や生死遂に擇ぶなきを悟りぬ此故に僕皮下注射の療治ありながら之を施すの資なき悲運を悲しまず同窓の諸子連りに氣燄を吐くをも羨まず靜かに心を行雲流水に任して農翁蒭童を友とし悠に病軀を養はんとす一朝假令死の命に接するも何をか憾みん』

これ余が友、伴武雄氏の書狀なり。氏は余よりも一年若く、前途望み多き青年なりしが、東都留學中肺を病みて古郷に歸り、一人の母の膝下に保養する身となりつ。余はその遂に助かるまじきを豫知し、軍艦よりも屢々書を送りて言葉の及ぶ丈け慰めたり。氏も亦た病をつとめて其病狀を報じ且つ余が遠征を問ひぬ。此句は其一ッの中に在り。

讀みて此句に至りし時、余が兩の頬に冷やかなる涙のつとうるを禁ず能はざりき。火消へなんとす。室内の空氣次第に冷ゆくを覺へぬ、あゝ余も年若し、前途の夢を歌ふ仲間なり。前途！前途！之れを逐ふとの墓なしとは知りつゝ、年少氣鋭のわれ等が夢は竟に此外に出でず。されど哀れの青年！彼れは心ならずも此句を吐くに至りぬ。これ彼れが病のために肉より吐く血に比して更らに無慘なる、心より吐く失望の鮮血に非ずや。

火は愈々消へんとす、寒氣益々加はるを覺へぬ。則ち石炭のかたまり五六個取りくべつ、火の燃

へ上るを待ちて背を火に向け、倚子に馬乘りす。思は何時しか郷里の空に飛び、友の蒼ざめたる顏、それよりも更らに蒼き母の顏、目前に浮び來る。八個の蠟燈今は僅かに其三個を餘すのみ、それすら光薄く。室の隅々暗くなりゆき。ペンキ塗りの板に赤き炎の影うつり、卓子の足、倚子の足などにもうつりて物すごし。煖爐のうちより甲板をわたる風の音きこゆ。

余は武雄君を見舞はんとて其宅を訪ひし去年の夏のヿを想ひ起しぬ。母は余が來訪を喜び、萩の餅の馳走すべしとて、臺所の方に忙しき時、余と武雄君とは、客間の椽先に坐して田舍生活のヿなど語る。庭に柿の大木あり葉いやが上に茂りて、庭一面に黑き影涼しく、葉のすきまより日光もれて黃金の如くに散り、垣根に葉雞頭の眞紅に染りたるが風にゆらぐもあり、余が眼底には此等のもの鮮やかに描かれつ。何心なく武雄君の顏を見れば、其の蒼きと已に此世の人に非ず、あゝ今此の如く余と相對して語る此の人、實に此の人、血あり肉あり、情あり淚あり、物いふ此の人、遠からずして一片の土と化するよと思ひし一刹那の寒心、再び今の事の如く想ひ起しつ。更らに其母の、絕望のうち僅かに親の愛に希望を夢むる其の憂苦の顏、ありありと瞑想のうちに浮びつ。余はケビン番兵が突然扉をひらき、内をのぞきし物音に驚くまではわが身軍艦に乘りこみ遠く大連灣に在るヿを忘れ居たり。

くべし石炭も燃へ盡きぬ。臘燈はたゞ一個を餘すのみ。飮まんに湯なく、語るに人なく、眠らんと思へど心たゞ冴へゆくのみ。室を出でゝ甲板に登りぬ。

余は今まで煖爐の前に在りたれば外套を着ず、忽ち外氣にふれたれば全身一時に氷るかと覺へたり。兩腕に力を入れて振ると數十度、強て首をあげ、濶歩して楷を登り、一段高きプーブデッキの上に出でぬ。後部旋回砲の傍に立つ黒き影は哨兵にぞある。

仰げば冬の夜の星みつ空深く澄み、北に滿洲の大荒に垂れ、東に郷國の天に接す。風やゝ落ちたれど猶ほ檣、端艇、煙筒、綱などを打つ音ものすごく警戒嚴に、燈火一點もれず、數十の巨艦何處にある。間近きもの兩三艘星光にすかして朧ろに見ゆれど、たゞ見る、眠るが如く、待つ處あるが如く、息を凝すが如く、又た永久に休むが如し。

氷りしデッキの上を強く蹈む靴の音、コツ々々と聞ゆ、これ哨兵歩を移すなり。艦橋の方に當り此音規則正しくきこゆ。これ當直士官が寒を凌ぐ唯一の手段とて、艦橋の上を右舷より左舷に、左舷より右舷に、四五間計りの處を、數百度となく、往復する、靴の音なり。

余艦橋の下に至りし時、上より誰れぞやと問ひぬ。余なりと答へて、階子を足早やに登りぬ。君なるか、まだ眠らずして何をかなすといふは余が尤も親しく語ろう某少尉の聲なり。

余『今夜の寒き事よ』。

少尉『非常に寒し。氷點以下十度なり』。

余は少尉と並びて、歩をそろへ、例の往復を始めたり。

少尉『君の相變らず夜ふかしするとよ』。

余『妄想は持前なり。朝寢は特權なり』。

少尉『その特權こそ羨ましけれ』。

余『妄想も亦た御互若きもの特權に非ずや。當直して獨り此の如く夜更けて二時間も四時間も同じ處を動物園の虎の如くに歩まい、君とても妄想に耽るとならん』。

少尉『其の妄想の御蔭にて氷點以下の寒氣も多少忘れらるゝを思へば成程これは、御互の特權なり』。

余『君の妄想は何事ぞや。若き軍人の夢こそ聞ゝたけれ』。

少尉、答へず。余は其の肩に手をかけて、

余『美しき妻にや』。

少尉『否、否、海軍の軍人には妻ほど無用のものはあらず。今日は東、明日は西、命を波の上に托するものに妻ありて何かせん。妻は陸に、夫は海に、數年の間相會する僅かに週を以て數ふるのみ。實に馬鹿氣たるものなり』。

余『立派に言ふもの哉。實際」を見よ。士官室に來る書狀は何處よりするが尤も多きぞ。先夜の細君寫眞競進會は何事ぞ』。

少尉『そは亦た何事ぞや』。

余『先夜の事なりき、某大尉が細君の寫眞をその私室より持ち來るや、彼方よりも此方よりも

續々細君の寫眞現はれ、忽ち一種の面白ろき光景を呈しぬ。君とても大尉の夢に伴ふもの、美しき妻に非ずして何ぞ』。

少尉は笑ひつゝ、

少尉『彼等は老人なり、余は少年なり。たれか老人のまねをする者ぞ。他の人は知らず、余には其妄想なし』。

余『嘗て書生の時、江田島は君の夢なりき、已に江田島に入るや、遠洋航海、シドニー、布哇は幾度か君の夢に入りしぞ。已にこれも過ぎぬ。然らば海軍少尉の今の夢は如何。釣床に問ふ可きか』。

少尉『夜更けて獨り茲に立てば、拳を握りつむることも少なからず。されど其は君の推測にまかす』。

かくて吾等は默したるまゝ、歩をそろへて往復すると二三度、余が思は忽ち又た伴武雄氏の上にかへりぬ。

余『余が友の一人に、肺病を得て死に近きつゝあるもの有り。余は今まで士官室にて其人の上を思ひ居たり』。

少尉『そは氣の毒なり、されど吾等とても死には緣の遠き方に非ず、敵若し膽畧だに在らば、水雷艇十艘、西口角を掠めて侵入し來り、不意に吾れを襲はゞ、味方の運命如何がある可き。魚形水雷一個、飛び來りて此千代田の中央に中りたりとせよ、死は吾等に緣遠きとも言ひ難し』。

と笑ひぬ。余は足を止め、

余『よし、然らば其の見張を君に御賴み申す、成るべくは緣遠き方に賴み度し。さらば！余は之れより眠らん』

と言ひ捨て、いそがしく階を下り、更らに一階を下りて上甲板に至り、余が寢室に歸れば、室內幽闇死の蔭の如し。

武雄君は今年六月二十三日午前三時に永眠せり。彼の書狀を認めて以來半年にして遂に逝きぬ。

（三）なまり

わが海軍にては、艦內の物名を英語にて呼ぶと自から慣習となり來りて、今日にても、多くは洋名を呼び日本語に改めず、其のため隨分抱腹すべきとあり。卓子の被布を英語にてカバア(cover)といふ、此のr(アール)を響かして士官は適常カバルといふ。然るに水兵之れを聞き誤りてカバラといひ、掃事の時などボーイ長が他の水兵に向て「オイ、カバラを持て來い、早くカバラを」など怒鳴るを傍に聞く士官は又た之れに聞きなれて別に正さんともせず。

ミルク(milk牛乳)を聞き誤りてミルコと呼び、更らに甚だしきは、某少尉の實話に、或水兵に向てギユーニユー(牛乳)を持ち來れと命ぜしに、其水兵通ぜざる風なれば「早くミルクを持ち來れ」といひあらためしに、水兵はじめて氣の付し如く「ミルコの事に候や、ギユーニユーなど云

ふ英語はドーも今まで聞かざりし樣なりしがサテはミルコに候か」と走り行きたりとぞ。

又た、或水兵見物人を案內し乍ら、プロテクチーブデッキ(protectivedeck 防禦甲板)の處に至りいとも鹿爪らしく「これこそはプロチクチクデッキと申すものなり」と口早やにごまかしたりとなん。

余が士官室に在りて士官諸氏と雜談して在りし時、兵曹の一人入り來りて副長に向ひ恭しく、言ふを聞けば「只今メートルに御願申せし處」云々。甲板士官のとを英語にてメート(mate)と稱す。之れを聞き誤りて米突と同音に用ひしと、兵曹が去りし後、士官諸氏の笑となり、メートルと信じて平然たる處愛らしと評し合ひぬ。

其他これに類したるなまり一々數へ難しとぞ。

(四)頓　首　三　度

大連灣に碇泊中、或日所用ありて艦長室に入りけるに、此れは又た何事ぞ、二人の支那人、敷物の上にあぐらかき、前に小机を置きて其上には食用ビスケット及び白砂糖置かれたり。余が入り來るを見て、之れ見よがしにビスケットの上に砂糖を載せ滿面如何にも喜れし氣なる樣子にて、ばり〳〵とかぢる有樣、余はたゞ呆るゝのみ。艦長は傍に倚子に腰打ちかけて二人が、馬の如く食ふ樣を、笑ひつゝ眺め居たり。一人の支那人は四十前後と思はれ、他の一人は少しく若かきが如く、兩人共髗骨突出して軀格偉大、粗末なる綿入れ着たるを見れば大連灣沿

岸の農夫なるべしとは一見して見分け易かり。余艦長に問ふて曰く、彼等は何者にやと、艦長答へて言けるには、昨日本艦のゼハヤ(小蒸滊の一種)にて鴨打ちに出かけし處、水兵の不注意より、とある淺瀨に乘せ上げ、其のうちに潮退き愈〻困難を極め、余は遂に上陸して支那人を探しジヤンクにて本艦まで送らしめんと决心し、漸くの事に上陸はしたれど日已に暮れて時もや丶立ち、四圍暗黑にして不知案内の地殆んど窮し、僅かに一軒の家を見出しければ手眞似にて意を通じたるに其家の翁快く承諾して直ちに此二人を周旋せり。此二人はジヤンクを用意し、二哩計りの海上を此寒氣に何の苦もなく送り呉れたるなり。今其の好意に酬ひんため聊かビスケツトの御馳走を致す處なりと。

支那人は艦長が以上の事實を余に語る樣を傍より猜して自分等が譽められ居るよと早やくも見て取り、ウン〳〵と余の顏を見て言ふ其の意味は、實に然り〳〵と自慢するもの丶如し。

吾等が僅かに一個を食ひ得る程のビスケツト、二人は各三個計り忽ちに食し了はりて平然と立ち去りぬ。

其後數日艦長は鴨打ちかた〴〵先日の支那人に禮のため出かけんと思ふが同道せずやとの事に、余は上陸ならば何時にても好むところ。小蒸滊にて諸共に最に艦長がゼハヤを乘せ上げたる沿岸の方を指して出發したり。行く先きは黃山砲臺の西一哩計りの淋びしき村落

なりける。

遠淺にて小蒸滊さへ着け難きを、岸邊に牡蠣漁り居たる支那人の小舟を呼び寄せて之れに乘移り、漸くにして磯岩に靴を着るを得たり。艦長いふ、先達は暗夜玆に上陸したるなり、其困難を推察せよと。

潮引き去りたるあとの泥砂藻草の上を靴爪立てゝ歩み、兎も角もして村の端に達しぬ。さて如何に探せども、先夜艦長が入りたる家らしきものゝ見當らず。これなるべしと其門の形にて推測し、艦長はじめ其他同伴の面々、水兵に至るまで七八人、どや〳〵と入り込みぬ。家のものは食事の最中なりしと見へ、室の中央に飯櫃の蓋ありて其上に茶碗を載せ、茶碗の中には粟と玉蜀黍と混ぜたる如き飯あり。傍の皿には大連灣の名物、大口魚の煮たるが盛られたり。家の者等は俄かに多人數押しかけたるため非常に驚き、悉く外に逃げ出でたり。主人の翁を見て艦長はこれなりと叫びぬ。余いふ、否、此老人は先日軍艦に來りたるものと異る。艦長の曰く、否、否、此翁が、先達の兩人を世話し呉れたるなり。余は此翁に禮せんとて來りたるなりと、余は始めて其の事情を知るを得たり。

されど翁は艦長を見知らず、艦長が與へんとて差出すビスケット及び砂糖の罐を押返して何事か頻りに囁き、頓首して詫入るものゝ如し。吾等見て謙遜辭退するものとなし、顏を和らげ、日本語にて遠慮には及ばぬ、これは先夜の御禮だから取て置けと言へど、勿論日本語の通ず

べき樣なく、彼は益々頓首して大閉口の躰なり。余いふ、思ふに此翁早やくも艦長を忘れ、吾等を以て徵發に來りしものと認め、此品の如きものを與へよと命ずるなりと誤解したるに非ざる乎。艦長或は然らんと此度は、更らに語を和らげ、いや、これは御前にやるのだよ、といへど通ぜず、通ぜずとは知りつゝも此の如き場合には屢々日本語を用ひたり。これ餘りのもどかしさに自然と發するなり。

困じ果てし時一人の若者の字を解するものを連れ來り、漢字にて、來意を書示したるに、若者は直ちに其旨を翁に告げぬ。翁の此時の驚き如何。艦長の顏を今更らの如くに眺め、奇聲を發して叫び、歡喜の色を滿面に表し、艦長の差出す鑵を受取りて押戴き、大地にひれ伏して頓首すると先きの頓首に倍す。

吾等去らんとする時、翁をはじめ一家の者悉く門に送りぬ。門を出づる時、艦長ポッケットより蜜柑一個取り出して、翁の傍に立つ十歲計りの愛らしき小兒に與へしを、小兒は恥かし氣に受取り、家のものは一同聲をあげて、謝し、翁の手小兒の頭上に置かれしと思ふや、小兒は大地に坐し頭を土につけ、頓首すると三度、これ支那人の家庭敎育なり。

(五) 二月七日の朝

夜は明けんとす! 戰は始まらんとす! と扉敲きて起こさるゝに岸破とはね起き、手早やく衣着更る時の心地! 何時までか忘らる可き。甲板に躍り出づれば、夜は明けんとす! 成程夜

は明けんとす！東の空を見よ。彼のしのゝめを見よ。曉星を見よ。嗚呼麗はしき曉天！。曉霧に眠る劉公島！。朦朧として水平線上に浮ぶ劉公島！そよ〳〵と吹き送る朝風！肉も骨も緊る。眞先きに進む、旗艦『松島』は朝の衣を着、殿艦『浪速』は未だ夜の幕のうちに在り。見よ！戰鬪旗、旗艦の檣上にのぼりぬ！



廉價無雙受驗者必携

再版出來

諸大家執筆
冨山房編

普通學問答全書

新刊報告

第壹篇 日本地理問答

第貳篇 世界地理問答

第三篇 日本歷史問答

第四篇 支那歷史問答

第五篇 世界歷史問答

右各篇皆其特色を具へ地圖あり沿革圖あり年表あり統計あり簡帙雅麗光彩陸離愛すべく掬すべし

洋裝寸珍頗美本
紙數每篇二百頁
各篇一學科完結
正價一冊拾貳錢
郵稅一冊四錢宛

前編既に無比の好評を博し今又編を逐ふて左に新刊す記述の精細簡易なる又前篇に讓らず學生及小學敎員必讀書也

第六篇 國語問答

第七篇 教育學問答

第八篇 學校管理法問答

第九篇 教授法問答

第拾篇 地文學問答

發兌元 東京神田裏神保町 冨山房書店

